

福島大学大学院地域デザイン科学研究科人間文化専攻（修士課程）案内

1. 人間文化専攻の目的

地域デザイン科学研究科において、人間文化専攻は、「人間・文化」を基盤に、多様な人々と協働しながら、豊かな地域社会を築いていくために必要とされる、イノベーション人材を養成します。

本専攻では、言語や芸術など人間社会が歴史的に創り上げてきた文化、心理、身体などの人間科学の専門的な探究・学際的な融合を通して、人間の全人的な在り方をデザインしていきます。社会が大きく変容している現代において、高度で多様な専門的知識をもち、地域との協働の中で新しい価値を創造して諸問題の解決を先導できる高度専門職業人を養成します。

2. 人間文化専攻の概要

本専攻は、「言語文化」「地域文化」「スポーツ・芸術文化」および「人間発達心理」の4つのコースを置いています。各コースの教育研究分野は、以下のとおりです。

コース	領域	教育研究分野
言語文化コース		日本語学，日本文学，漢文学，国語科教育学，英語学，英米文学，英語科教育学
地域文化コース		歴史学，地理学，社会学，経済学，倫理学，社会科教育学，食物学，被服学，家庭科教育学
スポーツ・芸術文化コース		スポーツ哲学，保健体育科教育学，スポーツ医科学，スポーツ社会学，バイオメカニクス，運動生理学，武道文化論，器楽，声楽，作曲・指揮，音楽科教育学，絵画，彫刻，美術理論・美術史，美術科教育学
人間発達心理コース	教育心理学領域	教育心理学，発達心理学，実験心理学
	幼児教育領域	幼児教育，幼児心理，保育内容
	臨床心理領域	臨床心理学，教育臨床学，発達臨床学，家族臨床学，児童福祉臨床学，非行・犯罪臨床学

3. コースの概要

(1) 言語文化コース

語学および文化学，言語文化教育に関する専門的な知識をもとに，文化を理解・継承・教育・創造する力を持ち，文化的に豊かな社会を創造できる人材を養成します。

(2) 地域文化コース

地域社会における様々な文化に関する社会科学・生活科学の専門的な知識をもとに，文化を理解・継承・創造する力を持ち，文化的に豊かな社会を創造できる人材を養成します。

(3) スポーツ・芸術文化コース

スポーツ・健康科学，音楽，美術に関する専門的な知識をもとに，スポーツ・芸術文化を理解・継承・創造し，文化的に豊かな社会を創造できる人材を養成します。

(4) 人間発達心理コース

人間の発達と心理に関する専門的な知識をもとに，子どもの発達を支援するとともに，さまざまな課題を抱える子どもたちの支援を行い，豊かな社会を創造できる人材を養成します。臨床心理領域では，特に，援助専門職（公認心理師，臨床心理士，スクールカウンセラー等）の人材養成および教育関係者の実践力向上を行います。なお，臨床心理領域は，昼夜間の開講です。

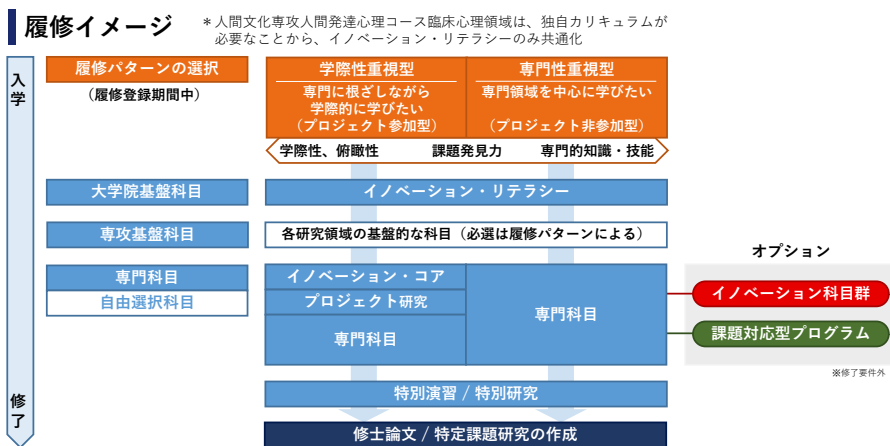
4. 教育課程

(1) 2つの履修パターン

学生の学修ニーズ・意向にあわせて、専門領域を中心に学ぶ「専門性重視型」と専門に根ざしながら学際的に学ぶ「学際性重視型」の2つの履修パターンを設定します。ただし、人間文化専攻人間発達心理コース臨床心理領域においては、臨床心理士、公認心理師の養成を目的とした専門性の極めて高い授業科目群によってカリキュラムが構成され、多数の専門科目を履修しなければならないため、「学際性重視型」の履修パターンを選択することはできません。

「学際性重視型」は要修了単位を30単位とし、「大学院基盤科目（イノベーション・リテラシー）」と「専攻基盤科目」の2科目4単位を必修とします。これらの科目は大学院が求めるイノベーション人材の育成と研究者としての基礎を培うことを目的としており、その上に「イノベーション・コア」と「プロジェクト研究」が位置します。これらの科目群は地域における様々な実践的活動を行う能力を育成することを目的としたものであり、この能力は「自専攻科目」「他専攻科目」の履修を通して理論的にも高められていきます。学際性重視型では、幅広い学修を行うために自専攻科目・他専攻科目とも4単位以上（他に自由選択科目2単位が必要）を履修することが求められています。これらの学びの上に、「特別演習」「特別研究」各4単位で研究能力を高め、修了研究（修士論文等）につなげていきます。

一方、「専門性重視型」では要修了単位を30単位とし、必修科目は「大学院基盤科目（イノベーション・リテラシー）」2単位だけです。「自専攻科目」14単位が選択必修となり、自らが属する専攻の授業科目を中心に専門性を深めます。「自由選択科目」6単位は学生が自らの専門性を深めるために必要であると判断した授業科目を、自専攻・他専攻を問わず履修することができます。このようにして深めた専門性の上に、「特別演習」「特別研究」各4単位で研究能力を高め、修了研究（修士論文等）につなげていきます。



(2) 授業科目と履修基準

① 大学院基盤科目「イノベーション・リテラシー」

学際性重視型、専門性重視型ともに、第1 Semesterで、福島大学大学院の共通科目である「イノベーション・リテラシー」を履修します。福島における震災復興プロセス・結果を多様な視点から振り返り、現状を総合的に理解するとともに、今日的な課題の抽出を目指します。その上で、代表的なイノベーション理論・手法の概要を理解し、先進的なイノベーションの取り組み事例を概観するとともに、自らの専門的な視点から理解を深め応用展開を考究していきます。

② 専攻基盤科目

「専攻基盤科目」は各専攻（専門分野）への導入科目であり、研究倫理、アカデミックスキルという研究科で共通して教育するコア部分に加えて、専攻に特有の課題へのアプローチ、研究の最新動向などを履修します。学際性重視型の必修科目です。

③ 「イノベーション・コア」と「プロジェクト研究」

学際性重視型では、実践力、学際性・俯瞰性、トランスファラブルスキルを身につけるために、第3セメスターで「イノベーション・コア」を、第1～3セメスターで「プロジェクト研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を履修します。

「イノベーション・コア」は、イノベーション・リテラシーの学修の上に、変革を主導するリーダー層を養成する科目です。多様なステークホルダーと協働して新たな価値創造を牽引していくために必要となる「対話」やファシリテーションの基礎的な知識やスキルを修得します。

「プロジェクト研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」は、学生と教員が特定の課題の研究プロジェクトに取り組み、計画の立案、調査の実施、結果の分析、報告書の作成・成果発表などを通して調査・研究力を養成する教育プロジェクトです。学生組織型と教員組織型を設定します。

④ イノベーション科目群【修了要件外】

各専攻では、専門分野における新領域や新機軸に関する科目、あるいはそれらを促進させる可能性がある科目など、イノベーションに必要な各種能力の向上に資する科目を「イノベーション科目群」として指定します。

人間文化専攻で指定するイノベーション科目は次のとおりです。

現代日本語特論、地域言語特論、英語構造論特論、社会言語学特論、地域と文化特論Ⅰ・Ⅱ、コミュニティ文化特論Ⅰ・Ⅱ、生涯生活マネジメント特論、スポーツ社会政策特論、スポーツクラブマネジメント特論演習、認知教育方法特論、発達心理学特論

⑤ 課題対応型プログラム【修了要件外】

地域や社会が抱える生の課題に対応するため、次の2つの「課題対応型プログラム」を設定します。プログラムの修了者には、「修了証」が交付されます。

「分野横断型プログラム」は、複雑化する21世紀的課題の解決に向けて、分野の枠にとらわれない幅広い知識を修得するために必要な科目をパッケージ化して提供するもので、専攻・研究科をまたいで開設されます。

「専門高度化プログラム」は、地域や社会が求める専門人材として、特定領域の高度な知識を修得するために必要な科目をパッケージ化して提供するものです。

＜学際性重視型＞

科目区分	大学院 基本設計	地域デザイン 科学研究科
大学院基盤科目	2	2
専攻基盤科目	2	2
専門科目	24	24
イノベーション・コア	2	2
プロジェクト研究	6	6
自専攻科目	4	4
他専攻科目	4	4
特別演習	4	4
特別研究	4	4
自由選択科目*	2	2

＜専門性重視型＞

科目区分	大学院 基本設計	地域デザイン 科学研究科
大学院基盤科目	2	2
専攻基盤科目	0～2	0
専門科目	22～28	22
イノベーション・コア	—	—
プロジェクト研究	—	—
自専攻科目	12～14	14
他専攻科目	—	—
特別演習	4または6	4
特別研究	4または8	4
自由選択科目*	0～6	6

*：専攻基盤科目、専門科目の選択科目から、学生が自らの学修に必要な科目を選択して履修する。
(人間発達心理コース臨床心理領域は独自カリキュラムが必要なことから、大学院基盤科目のみ共通化。)

(3) 学位の授与

本専攻に2年以上在籍し、履修基準に基づき所定の単位を修得し、かつ必要な教育指導を受けた上で、修了研究の審査に合格した者には、修士（人間文化）学位が授与されます。

(4) 授業科目の概要および担当教員

(ただし授業科目名、授業科目の内容および担当教員の一部を変更することがあります。)

○言語文化コース

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
現代日本語特論	計量的な日本語研究の方法について考察する。日本語研究の中でこれまでに用いられた多変量解析の技法について概観するとともに、電子化された言語データを使用し、実際にアプリケーションソフトを用いて各技法の使用法を学ぶ。具体的には、記述統計、クロス集計、検定といった基礎的な技法のほか、因子分析、林の数量化理論、クラスター分析、重回帰分析、VARBRUL、パス解析、SEMなどを扱う。コンピュータリテラシーと一定の数学的素養が要求される。	2	教授 半沢 康
現代日本語特論演習Ⅰ	計量的日本語研究の実践。現代日本語特論の講義内容を踏まえ、受講者がそれぞれ、自己の興味関心に基づいて、現代日本語に関するデータ収集のための調査を企画し、多変量解析を適用した分析を行う。日本語の音声、文法的変異に関する事象、待遇表現などの言語運用に関わる事象、日本語の世代的変異等が調査対象として想定される。調査はフィールドワークを原則とし、各自の企画を盛り込んだオムニバス調査を共同で実施する。前期にⅠを開講し、調査計画および実査を行う。調査の企画力および実査への貢献が重視される。	2	
現代日本語特論演習Ⅱ	計量的日本語研究の実践。現代日本語特論の講義内容を踏まえ、受講者がそれぞれ、自己の興味関心に基づいて、現代日本語に関するデータ収集のための調査を企画し、多変量解析を適用した分析を行う。日本語の音声、文法的変異に関する事象、待遇表現などの言語運用に関わる事象、日本語の世代的変異等が調査対象として想定される。後期にⅡを開講し、前期Ⅰで行ったオムニバス調査によって得られた受講者各自のデータを用い、分析結果について口頭発表を行う。前期Ⅰの履修を前提とする。	2	
地域言語特論	方言研究の方法について考察する。本年度は社会言語学的な観点に基づく言語変化研究を扱う。諸文献の講読を通じて、戦後の国語研究所による言語生活研究、各地で実施された共通語化の研究、日本出自の技法であるグロットグラム法などの成果を概観し、方法を把握するとともに各研究の問題点についても考察する。日本語方言の研究にとどまらず、W. Labov, P. Trudgill, J. Chambersら欧米の研究者による研究にも目を配る。また随時コンピュータを用いて実際の方言データの分析実習も行う。	2	
地域言語特論演習Ⅰ	方言研究の実践。受講者各自の研究テーマに基づいてそれぞれが方言調査を企画し、分析結果を発表する。音声、アクセント、文法、語彙の地理的な変異のほか、共通語化や方言意識なども調査対象として想定される。調査はフィールドワークを原則とし、各自の企画を盛り込んだオムニバス調査を共同で実施する。前期にⅠを開講し、調査計画および実査を行う。調査の企画力および実査への貢献が重視される。	2	
地域言語特論演習Ⅱ	方言研究の実践。受講者各自の研究テーマに基づいてそれぞれが方言調査を企画し、分析結果を発表する。音声、アクセント、文法、語彙の地理的な変異のほか、共通語化や方言意識なども調査対象として想定される。調査はフィールドワークを原則とし、各自の企画を盛り込んだオムニバス調査を共同で実施する。後期にⅡを開講し、前期Ⅰで行ったオムニバス調査によって得られた受講者各自のデータを用い、分析結果について口頭発表を行う。前期Ⅰの履修を前提とする。	2	
日本近代文学特論	文体という観点から日本における近代文学の変遷を辿る。文語文体から言文一致を経て自然主義の隆盛へ向かう明治期、モダニズム的な様相を呈する大正期、関東大震災後から戦時下へ向かう昭和期、多様な様式が展開される戦後と、それぞれの時代の小説を文体という視角からアプローチすることで、小説の方法や様式を把握する。	2	准教授 高橋 由貴
日本近代文学特論演習Ⅰ	明治期から昭和までの日本の小説（あるいは日本語小説）を取り上げ、これらを「西洋と東洋」というテーマから論述する。明治期以来、文学において日本の外部である「西洋」という〈他者〉や「東洋」という〈自ら〉をどう表象するかについて様々な試みがなされてきた。この「自己と他者」という問題を洋の東西という視点から考える。	2	
日本近代文学特論演習Ⅱ	昭和から令和に至る現代までの日本の小説（あるいは日本語小説）を取り上げ、これらを「外国と本国」というテーマから論述する。長い戦争期を経て、文学において日本の外に在る〈他者〉や日本に在る〈自ら〉をどう表象するかについて様々な試みがなされてきた。この「自己と他者」という問題を内と外の両面の視点から考える。	2	
比較文学特論	西洋文学の受容を視野におさめながら、日本における文学の形成について論じる。具体的には、毎回1篇の小説や詩のテキストを取り扱い、文体や様式、掲載雑誌やジャンルなどに目配りしながら文学史的位置づけを行う。特に構造主義以降のポストコロニアリズム的状况を理解しながら、日本（語）文学のあり方を考え、より深く理解する。	2	
比較文学特論演習Ⅰ	「比較文学・比較文化とはなにか」というテーマで比較文学という方法の多様性について考える。エリアスタディーズ（地域研究）、トランスレーションスタディーズ（翻訳研究）、絵画や写真、映画や演劇といった他ジャンルとの比較やアダプテーションの問題など最新の研究手法や動向も踏まえながら、文学・文化への方法的アプローチを取り上げ、その可能性の広がりを理解する。	2	

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
比較文学特論演習Ⅱ	「比較文学・比較文化とはなにか」というテーマでひき続き比較文学という方法の多様性について考える。飛躍的に発展している翻訳研究をはじめ、フェミニズム、アダブテーションといった最新文学理論、エコクリティシズムやアニマルスタディーズといった研究手法・動向も踏まえながら、文学・文化への方法的アプローチを取り上げ、その可能性の広がりを理解する。	2	准教授 高橋 由貴
日本古典文学特論	相互に関係のある複数の日本古代文学作品について、それらの諸作品が作られた時代の政治や文化、制度や社会、他の内外の作品との影響関係などの観点から、それぞれの特徴や意義、および相互の関係性などについて考察する。授業の進め方としては、最初に日本古代文学史について概説し、講義中に取り上げた作品の中から主要なものを学生に選択させて、先行研究や独自の調査を織り込みつつ講読していく。	2	教授 井 實 充史
日本古典文学特論演習Ⅰ	日本古代文学の和文テキスト（古文のみで書かれている文章や作品）について、先行研究を踏まえて独自に調査し、研究史を総括しつつ批判的に検討できるようになることを目標とする。具体的には、日本古代文学のなかから特定の作品を取り上げ、校本、諸注釈書、主要な先行論文等の事前調査を受講生に課し、その発表内容を吟味・検討するかたちで進めていく。最終的には演習の成果をレポートとしてまとめる。	2	
日本古典文学特論演習Ⅱ	日本古代文学の漢文テキスト（漢詩文のみで書かれている文章や作品）または和漢混在テキスト（漢詩文と古文が混在する文章や作品）について、先行研究を踏まえて独自に調査し、批評できるようになることを目標とする。具体的には、日本古代文学のなかから特定の作品を取り上げ、校本、諸注釈書、主要な先行論文等の事前調査を受講生に課し、その発表内容を吟味・検討するかたちで進めていく。研究の成果をレポートとしてまとめる。	2	
日本文学特論	日本文学の形成過程および特質について、伝統的な美意識の形成と展開を主軸に据えて、言葉、作家、風土、社会、ジャンル、歴史、外国文化・文学・思想との関連など多面的な観点から講義する。また、日本文学がどのように享受されているかについて、学校教育における文学教材のあり方や特徴を主軸に据えて、詩歌、物語・小説、随筆・エッセイ、日本文化論を取り上げ、文学研究の立場から講義する。	2	
日本文学特論演習Ⅰ	学生が主体となって、時代や文化の異なる複数の日本文学作品を取り上げ、先行研究を踏まえて独自に調査・分析・批評することを通して、日本文学の形成過程および特質について明らかにする。具体的には、学生が取り上げた複数の作品について、校本、諸注釈書、主要な先行論文等の事前調査を学生に課し、その発表内容を吟味・検討するかたちで進めていく。最終的には演習の課題と成果をレポートとしてまとめる。	2	
日本文学特論演習Ⅱ	学生が主体となって、学校種や学年の異なる複数の文学教材を取り上げ、学校教育における文学教材のあり方や特徴を探ることを通して、日本文学がどのように享受されているかについて探究する。具体的には、学生が取り上げた複数の文学教材について、その文学的意義や価値および先行実践例の問題点などの事前調査を課し、その発表内容を吟味・検討するかたちで進めていく。最終的には演習の課題と成果をレポートとしてまとめる。	2	教授 澁澤 尚
漢文学特論	漢文学における中国古代神話は、従来、孤立断片的な「涸れたる神話」と見なされ、その体系性のなさがしばしば指摘されてきたが、もともと稀薄だったわけではない。授業の前半は枯渇の主因となった儒教の經典化や經典の歴史化について講述し、後半は豊饒な神話的世界を、主に『楚辞』をもとに読解し、巫祝文化との関係についても講述する。なお、理解の度合を確認するため毎時レポート提出を求める。	2	
漢文学特論演習Ⅰ	漢文学における原典として『尚書』『山海経』を中心に読解・分析をすすめるが、演習に先立ち漢文学や漢字の特質、難解な古代漢語の特質（語彙・語法・音韻等）、および各種工具書（特に古辞書類）についての概説を丁寧におこない、導入とする。また、読解の前には日中欧の神話研究法、および研究史について概観する。演習の際は、毎時レジュメを用意する。	2	
漢文学特論演習Ⅱ	漢文学における原典として『淮南子』『莊子』『楚辞』を中心に読解・分析をすすめるが、演習に先立ち漢文学や漢字の特質、難解な古代漢語の特質（語彙・語法・音韻等）、および各種工具書（特に古辞書類）についての概説を丁寧におこない、導入とする。また、『楚辞』読解の前には、古代歌謡の特質について楚地域における巫風と関わらせて解説する。演習の際は、毎時レジュメを用意する。	2	
中国思想特論	漢文学の根底に流れる道家思想から、特に「混沌」「渾淪」の概念について、「老荘列」の三書から具体例を示しつつ講述する。特に『列子』における楽園説話成立の背景に、「崑崙」「空同」「華胥」「終北」に代表される混沌境地の地理的表象や至人描写があることを詳述する。なお、授業理解の度合を確認するため、毎時小レポートと短い漢文原典読解の提出を求める。	2	
中国思想特論演習Ⅰ	漢文学における道家思想の原典として、『老子』と『莊子』を中心に読解分析をすすめるが、演習に先立ち難解な古代漢語の特質（語彙・語法・音韻等）、および各種工具書（特に古辞書類）についての概説を丁寧におこない、導入とする。また、日中欧の研究法・研究史を概観するとともに、『莊子』読解の前には、古代思想の特質について真人・神人における異形の原像と関わらせて解説する。演習の際は、毎時レジュメを用意する。	2	

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
中国思想特論演習Ⅱ	漢文学における道家思想の原典として、『莊子』と『列子』を中心に読解分析をすすめるが、演習開始に先立ち難解な古代漢語の特質（語彙・語法・音韻等）、および各種工具書（特に古辞書類）について簡単に確認し導入とする。また、『列子』読解の前には、古代思想の特質について先秦の諸子百家における寓話・寓言と関わらせて解説する。演習の際は、毎時レジュメを用意する。	2	教授 澁澤 尚
国語科教育特論	国語科教育法には、様々な理論と方法が存在する。本特論では、「単元学習」「文芸研」「読み研」「分析批評」「一読総合法」「読者反応論」「読書指導（ブックトーク・アニメーション等）」といった様々な理論や、垣内松三、西尾實、芦田恵之助といった国語教育学の古典となっている研究について理解を深める。また、情報機器の扱いを含めたメディア・リテラシー教育の現況を知り、今後の国語科教育の展望を探る。	2	教授 佐藤 佐敏
国語科カリキュラム特論演習	本特論演習では、「単元学習」「文芸研」「読み研」「分析批評」「読者反応論」「読書指導（ブックトーク・アニメーション等）」といった様々な方法論に則ったカリキュラムを分析する。また、情報機器の扱いを含めたメディア・リテラシー教育のカリキュラムを分析する。その上で、小学校、中学校、高等学校の具体的な教材をもとにそれぞれの方法論に沿ったカリキュラムを作成し、その可能性や問題点を整理する。	2	
国語科教育実践研究Ⅰ	「実践報告」と「実践研究」の違いを理解した上で、国語科教育学における質的研究と量的研究の方法を理解する。その上で、多くの教育実践論文を分析し、教育実践論文の書き方を習得する。具体的には、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと（文学的文章・説明的文章・古典）」「メディア・リテラシー教育」といった各領域を扱い、また、小学校、中学校、高等学校といった各校種の教育実践論文を取り上げる。	2	
国語科教育実践研究Ⅱ	先進的な研究授業を公開している教育現場に出向き、様々な情報機器を活用してその授業記録をとる。そのデータをもとに、質的な分析と量的な分析の両方を試みる。その実践に対して、国語科教育特論や国語科カリキュラム特論演習で習得した理論と照らし合わせて、様々な視点から考察を加える。抽出時に偏った分析にならないように統計処理をしながら客観性の高い分析をし、様々な理論に基づいた蓋然性の高い考察を加えることを期する。	2	
英語意味論特論	自然言語における意味の数学・論理学的側面を概観する。授業では、意味研究の基盤となる古典的な命題論理、述語論理、様相論理の基礎を学び、形式意味論における真理条件、モデル、合成性の3つの基本的概念の理解を深めることを目的とする。授業は、文献講読を中心に進める。	2	准教授 佐藤 元樹
英語意味論特論演習	生成文法理論における統語論、意味論、および両インターフェイスに関わる具体的研究を取り上げ、言語における合成的側面や構造と意味の対応関係について考察する。演習では、担当者が古典的研究論文や近年の重要研究論文を発表、または自身の研究テーマの調査結果を報告し、ディスカッションを行う。	2	
英語意味研究Ⅰ	自然言語における意味の数学・論理学的側面を概観する。授業では、意味研究の基盤となる命題論理と述語論理の基礎を学んだ後、イベントを基礎概念とする意味論の考え方を導入し、副詞の修飾、時制、アスペクトについて考察する。授業は、文献講読を中心に進める。	2	
英語意味研究Ⅱ	自然言語における意味の合成的側面について考察する。授業では、生成文法理論における意味部門（LF）に関わる言語現象（作用域、束縛関係等）を取り上げ、統語と意味の両側面から各現象に関する分析方法を考察する。授業は、文献講読を中心に進める。	2	
英語構造論特論	統語論と意味論の関係を中心に生成文法のこれまでの理論的展開を概観することにより、生成文法の基本的概念・思考法を理解する。生成文法の概説を通じて生成的言語研究の基本的事項について理解する。理論の変遷が個別現象の分析と生成文法の目標とどのように関係するかについて理解するとともに、生成的言語研究における理論的展開がどのように動機づけられてきたかを学ぶ。	2	教授 朝賀 俊彦
英語構造論特論演習	統語と意味のインターフェイス研究の観点から、特にレキシコンの位置づけと統語と意味の対応の問題を確認しながら、先行研究の文献講読を通じて生成文法理論各論として批判的事例研究を行う。受講者の研究テーマとの関わりにおいて先行研究の位置づけを理解するとともに当該研究の理論的意義を理解する。	2	
英語構造研究Ⅰ	形式と意味の対応を中心に、英語学領域における各自の研究テーマに関する先行研究の文献報告を通じて生成文法各論としての事例研究を行う。先行研究の中で示される具体的な言語データや分析について、各自の研究テーマにおける位置づけを確認するとともに、各自の問題意識に照らして詳細に検討することにより、受講者自らの研究において当該の研究が持つ意義を明らかにする。	2	
英語構造研究Ⅱ	形式と意味の対応を中心に、各自の研究テーマに関する先行研究の文献報告を通じて生成文法各論としての事例研究を行う。特に統語構造と解釈の非対応の問題をめぐる、概念意味論に基づく研究や、構文・スキーマを用いた研究の成果を踏まえて、意味構造の理論と意味分析の手法について理解する。	2	

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
社会言語学特論	「言語」「社会」「文化」「認識」の関係を、身近な問題と引き比べながら検討していく。社会的変数に焦点をあて、地域、階層や階級、性、年齢、役割などが、言語にどのような影響を与えているか、文化変容とどのような関係を持っているかなどの検討を行う。さまざまな言語変種がどのような過程を経て生まれ、現実社会の中でどのように扱われているかを考察する。とりわけ、「女ことば」に関する歴史的考察とそれに対する社会の姿勢を通時的にたどることによって、ジェンダーとことばの現代的解題を明らかにする。また、そうしたことばに対する社会的な姿勢の変遷が、歴史的、社会的、経済的な変容とどのように関わっているかを取り上げ、法律の改正、産業形態の変化、社会的意識の変容の関係を検討する。	2	教授 久我 和巳
社会言語学特論演習	「言語」と「社会」の関係について、共時的なパロールのありように注目し、談話分析および修辞学の基本を検討するとともに、文学や映画、日常会話などの具体的な言説の分析を行いながら、時代状況や社会との関係を検討する。これらの検討を踏まえた上で、談話における権力関係やポライトネスといった観点から、言語権の問題を考察する。談話分析においては、個々のテキストで移行する権力関係の問題を取り上げ、会話の中で交差する話者の関係のあり方を具体的に分析する。それに伴い、会話場の直喩、隠喩、換喩など、多様なレトリックの表象と効果を分析し、言語行為論の再検討を行う。それらの検討を踏まえて、SNSなどの現代社会における発話のありようを問いかける。	2	
映像文化研究Ⅰ	映像文化の誕生と発展の黎明期に焦点を当て、リュミエール、エジソンの発明を検討しながら、複製技術の誕生とその意味について考察する。映画という存在が複数の科学的成果および従来の人文学的蓄積のもとに誕生したことを確認しながら、それが社会に対してどのような影響をもたらしたかを検討する。とりわけ、複製技術の誕生によって生まれた映画館という存在がどのような変遷を遂げ、人々の消費活動と関わっていったのかを論じる。さらに、グリフィス、エイゼンシュテインのモンタージュ理論が映画と映像文化にどのような影響をもたらしたのか、映画と社会の関係について理解を深める。	2	
映像文化研究Ⅱ	映像文化が現代社会に与える影響を、メディア、大衆文化のありかたと関連させて検討する。印刷技術、複製技術、写真や映画に関わる技術など科学技術の発達の歴史と重ね合わせながら、グローバリゼーションの進行に伴う文化変容とその受容の現状を考察するとともに、現代社会の文化現象について具体的に検討する。テキスト、プロダクション、オーディエンスとの関係に焦点を当て、大衆文化がそれらの均衡によってどのように変容していくかを論じていく。とりわけ、近年注目されているアニメーション映画の聖地巡礼や原作とその映画化についてのアダプテーションの問題を取り上げる。	2	
初期近代英米文学特論	15世紀から17世紀の英国初期近代における韻文、散文の文学テキストを用いて、文学テキストの意味作用を理解することを目的としている。とりわけ、ジェンダー、階級、人種などのカルチュラル・スタディーズなどの観点から考察を加える方法を教えるとともに、自分なりの英米文学に関する理解の方法論を身につけるための技法について明らかにする。	2	教授 川田 潤
初期近代英米文学特論演習	15世紀から17世紀の英国初期近代における韻文、散文などの文学テキストなどを用いて、文学テキストと当時の英国の社会・文化的な状況の相互関係を明らかにし、文化理解を図ることを目的としている。授業時には原典テキストの精読と周辺資料の多読を同時に行う。そのような作業を通じて、文化的な観点からの英米文学理解を目指す。	2	
初期近代英米文化研究Ⅰ	15世紀から17世紀の英国初期近代における文学テキスト・歴史資料、政治、経済パンフレットなどを用いて、文学テキストと当時の英国の社会・文化的な状況の相互関係を明らかにし、主に共時的な文化理解を図ることを目的としている。その際に、同時代における意味の関連性と広がり注目して読む力を、英米文学に関して、身につける。	2	
初期近代英米文化研究Ⅱ	15世紀から17世紀の英国初期近代における文学テキスト・歴史資料、政治、経済パンフレットなどを用いて、文学テキストと当時の英国の社会・文化的な状況の相互関係を明らかにし、それを基盤として通時的な観点からの文化理解を図ることを目的としている。その際に、とりわけ、テキストの読解における解釈者のスタンスに気をつけながら英米文学を読む力を学ぶ。	2	
近代英米文学特論	英国を代表する文芸批評家 (F. R. Leavis, Raymond Williams, Terry Eagleton) のテキストを読む。文学作品をそれが輩出された当時の時代思潮と結びつけることによって、それを読んだだけでは分かりにくい諸問題 (植民地主義, ナショナリズム, 資本主義, 帝国主義など) を浮かび上がらせ、そして、その作品の意義を考察する手がかりをつかむことを、この授業の目的とする。授業は、基本的に受講生の発表と質疑応答による演習形式で進める。	2	教授 高田 英和
近代英米文学特論演習	米国を代表する文芸批評家 (Edward W. Said, Fredric Jameson, Jed Esty) のテキストを読む。文学作品をそれが輩出された当時の時代思潮と結びつけることによって、それを読んだだけでは分かりにくい諸問題 (植民地主義, ナショナリズム, 資本主義, 帝国主義など) を浮かび上がらせ、そして、その作品の意義を考察する手がかりをつかむことを、この授業の目的とする。授業は、基本的に受講生の発表と質疑応答による演習形式で進める。	2	

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
近代英米文化研究Ⅰ	19, 20世紀の英米の社会と文化についての文献を読む。具体的には、Peter J. Kalliney の <i>Cities of Affluence and Anger : A Literary Geography of Modern Englishness</i> (2007) を読む。21世紀に生きるわれわれの世界は、19, 20世紀の英米を中心とした世界と、どのように断絶しまた連続しているのか。概観し、考察する。キーワードは「資本主義、階級、ジェンダー、セクシュアリティ」となる。授業は、基本的に受講生の発表と質疑応答による演習形式で進める。	2	教授 高田 英和
近代英米文化研究Ⅱ	19, 20世紀の英米の社会と文化についての文献を読む。具体的には、Bruce Robbins の <i>Upward Mobility and the Common Good : Toward a Literary History of the Welfare State</i> (2007) を読む。21世紀に生きるわれわれの世界は、19, 20世紀の英米を中心とした世界と、どのように断絶しまた連続しているのか。概観し、考察する。キーワードは「資本主義、階級、ジェンダー、セクシュアリティ」となる。授業は、基本的に受講生の発表と質疑応答による演習形式で進める。	2	
英語教育学特論	教育的介入の効果（教育効果）を検証するには、教育的介入の目的に照らして適切な評価が不可欠である。適切な評価を行うには、評価が目的に沿っていることに加え、様々な妥当性の根拠を示すことが求められる。本授業は英語教育における評価の意義と役割について理解を深めることを目的とする。言語テスト理論に関する文献講読を通して、目的に応じた適切なテストの作成、テストが学習者に与える影響（波及効果）の検討、そしてテスト得点の処理方法について理論を身につける。	2	准教授 高木 修一
英語教育学特論演習	指導と評価の一体化を実現するためには評価の意義と役割について理解を深め、教育的介入の効果（教育効果）の適切な測定や望ましい波及効果をもたらすフィードバックの実践が不可欠である。本授業は、英語教育における評価の意義と役割について理解を深め、妥当性の高い評価を実践する力を身につけることを目的とする。ペーパーテストおよびパフォーマンステストの作成、プロダクトの評価、そしてテスト得点の処理に関する演習を通して、言語テスト理論に根ざした評価を実践できるようにする。	2	
英語教育学研究Ⅰ	英語教育学は学際的な分野であり、実験心理学に基づいたアプローチを中心に様々な研究領域の研究手法が応用されている。実験結果から確かな結果を主張するためには、内的妥当性などの条件を満たした研究デザインを採用する必要がある。本授業は、英語教育学の研究メソドロジーについて理解を深め、研究目的に沿った研究デザインを検討する力を身につけることを目的とする。英語教育学および実験心理学の研究手法に関する文献講読を通して、先行研究に基づいてリサーチクエスチョンを設定し、内的妥当性の高い研究デザインを構築できるようにする。	2	
英語教育学研究Ⅱ	英語教育学研究のアプローチは多様化しており、従来の量的分析に加え、質的分析や混合研究法など様々な研究手法が用いられるようになってきている。そのため、研究の目的に照らして適切なアプローチを見極める必要がある。本授業は、英語教育学の研究メソドロジーについて理解を深め、様々な研究デザインに適した分析手法の検討および実践する力を身につける。統計分析を中心とした量的分析と質的分析に関する文献講読および分析演習を通して、研究目的や研究デザインに照らして適切な分析を実施できるようにする。	2	
第二言語習得特論	第一言語と第二言語（外国語を含む）の習得過程の特徴（類似点と相違点）について理解を深める。さらに、日本語を母語とする学習者が様々な校種において外国語として英語を学習する際（外国語活動および英語科教育）の言語事象の特徴について文献を踏まえつつ理論を身につける。	2	教授 佐久間康之
第二言語習得特論演習	日本語を母語とする学習者が外国語として英語を学習する際（外国語活動および英語科教育）のプロセスの特徴について理解を深める。心理言語学の調査に基づく演習を通して、言語学習プロセスを徹視的かつ巨視的な視点で理解できるようにする。	2	
第二言語習得研究Ⅰ	第二言語習得のメカニズムについて、心理言語学の記憶研究の視点から理解を深める。文字言語および音声言語の情報処理プロセスにおける記憶の役割の特徴を理解する。さらに、外国語環境にある日本語の母語話者が英語を理解し習得する際に重要となる要因について検討する。	2	
第二言語習得研究Ⅱ	第二言語習得のメカニズムについて、心理言語学の記憶研究に基づく実証方法を深く理解する。外国語環境にある日本語の母語話者が英語を理解し習得する際に重要となる要因の解明とその要因に基づく有効な指導方法を考察する。	2	

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
英語教育実践特論	This class will draw from ideas and theories about the teaching of English, beginning with the instructor showing students how they look in practice. Students will then be encouraged to choose, from the variety of approaches learned (through readings, videos, and observations in this and other classes), those they feel most comfortable and confident in. They will be asked to demonstrate, critique, and adapt their approaches through follow-up discussions and readings. Lastly, students will consider the applicability of the research to English teaching based on the Course of Study, including the use of information and computer technologies. この授業は英語で行われる。まず、授業担当者が様々な指導法の実践を示し、英語教育に関する考え方や理論について学ぶ。次に、受講生は文献講読や授業観察等を通して学んだ様々な指導法の中から、自身にとって最も自信があり適切だと考える方法を選ぶ。その上で、学習指導要領を含めた文献講読での解説やディスカッションを通して、その指導法の実践、批評そして改善を行う。	2	教授 真歩仁 しょうん
英語教育実践特論演習	Building on 英語教育実践特論, students will learn how to tackle and incorporate approaches about which they feel less confident, with the goal of becoming a more flexible and adaptable teacher. In addition, while reviewing studies in team-teaching related issues, we will consider how several types of team-teaching partners (both native and non-native English speakers) could be involved most effectively. Lastly, students will consider the applicability of the research to English teaching based on the Course of Study, including the use of information and computer technologies. この授業では、英語教育実践特論で学修したことに基づき、より柔軟で適応力の高い教員になることを目指して、受講生にとって自信がない指導法を取り入れるための方法を学ぶ。さらに、チーム・ティーチングに関連する研究を概観し、英語母語話者および英語非母語話者を含めた様々なパートナーとの効果的な関わり方を検討する。また、これらの検討結果に基づき、ICTの活用を含め、学習指導要領に基づいた指導への応用可能性を検討する。	2	
英語教育実践研究Ⅰ	Students will begin by explaining, reviewing, and (if possible) demonstrating areas of difficulty that they have noticed in their English-teaching practice. We will then summarise and discuss both articles and experiences that apply to those problems. Further, students will be encouraged to do their own research and lead in readings of articles on issues they believe are likely to arise in their future teaching contexts. この授業ではまず、自身が考える英語教育の授業実践における問題点について、受講生が説明や概観を行う（可能であれば授業実践の実演も行う）。次に、そこで指摘および検討された問題点について、学術文献や実践経験に基づいて整理とディスカッションを行っていく。その上で、将来的に教育現場で生じると考える問題点について、文献講読や研究の遂行を行う。	2	
英語教育実践研究Ⅱ	Students will begin by expressing particular concerns that they have noticed in their English-teaching practice and in realising Course of Study objectives. We will then look at teaching issues from a range of cross-cultural standpoints, while relating them to our own experiences as teachers, learners, and users of foreign languages. Further, they will be coached on how to follow-up on their research interests, and will have at least three opportunities to present on articles related to themes such as Pragmatics, Intelligibility, goal-achievement, and statistics in language-learning studies. この授業ではまず、受講生が自身の英語授業の実践を通して気づいた問題点について、英語の学習指導要領の目的と照らし合わせつつ説明を行う。次に、受講生の教師、学習者そして外国語使用者としての経験と関連づけつつ、それらの問題点を異文化の観点から検討する。さらに、自身の研究の関心を追究できる方法論を身につけるため、語用論、明瞭さ、到達目標の達成および言語習得研究における統計学などに関する研究テーマの文献発表を行う。	2	
外国文化特論	主にドイツ・ロマン主義の文学作品、および文学論を読み、ロマン主義運動の本質を探索。扱う作品としては、ノヴァーリス『青い花』『キリスト教世界あるいはヨーロッパ』、フリードリヒ・シュレーゲル『ロマン派文学論』『ルツィンデ』、ハインリヒ・フォン・クライスト『マリオンネット劇場について』などを予定している。ただし学生からの要望に応じて扱うテキストを変更することも可能である。ドイツ語の知識は問わないが、あるに越したことはない。	2	未定

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
外国文化特論演習	特論で扱ったテキストに関して、さらに深く追求して分析することを試みる。学生による発表とそれに関する議論が授業の中心となる。テキスト分析と研究発表の技術向上を目指すことがこの授業の目的である。扱うテキストについては、受講者の希望もある程度考慮するが、担当者の専門のロマン主義を扱うことが多い。ドイツ語は必須ではないが、できることが望ましい。受講者には原文をおろそかにしないテキスト研究を心がけて頂きたい。	2	未定
外国文化研究Ⅰ	ドイツ文学における「異文化理解」のモチーフについて、作品を読み、考察を行う。ドイツ、およびヨーロッパにおける「異文化理解」の形の変遷を、時代を追って概観することが目的である。教材はコピーを配布する。教材を熟読し、問題点を明確にする作業が必須となる。扱う作品としては、クライスト『聖ドミンゴ島の婚約』、アヒム・フォン・アルニム『エジプトのイザベラ』などを予定しているが、受講者の希望にも応じる。ドイツ語の知識は問わないが、あるに越したことはない。	2	
外国文化研究Ⅱ	外国文学研究Ⅰを受講した学生が主な対象となる。未受講の学生の履修は個別に相談に応じる。ドイツ文学における「異文化理解」について、学生からも議論の題材となるテキストの提案が求められる。こちらで用意する題材としては、作者不詳『ニーベルングの歌』、レッシング『賢者ナータン』、ヘルダーリン『ヒュペリオン』などを考えているが、受講者の希望にも応じる。ドイツ語の知識は必須ではないが、あるに越したことはない。	2	

○地域文化コース

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
日本社会文化史特論Ⅰ	日本史上の諸問題について、文献の講読を通じて、社会・文化の側面から理解を深めることを目的とする。あらかじめ指定した先行研究のテキストを毎回読んできてもらい、授業のなかで議論を行う。本授業では、主に在地社会と文化に関するテキストを取り上げる。受講者には、研究史を批判的に評価する術の習得、研究の内容に対する理解の深化と共に、研究の方法論の理解を求める。	2	教授 小松 賢司
日本社会文化史特論Ⅱ	日本史上の諸問題について、文献の講読を通じて、社会・文化の側面から理解を深めることを目的とする。あらかじめ指定した先行研究のテキストを毎回読んできてもらい、授業のなかで議論を行う。本授業では、主に都市社会と文化に関するテキストを取り上げる。受講者には、研究史を批判的に評価する術の習得、研究の内容に対する理解の深化と共に、研究の方法論の理解を求める。	2	
日本地域文化史特論演習Ⅰ	歴史学は、過去の事象を史料を用いて解明しながら論理的に説明する学問である。そのためには、史料の読解能力、特に正確に解釈する能力が不可欠である。さらに、現在の個別細分化された研究状況においては、地域の具体的な事例から歴史の全体像に迫ることが重要となってくる。そこで、日本史の史料の中から、特に地域史・文化史に関わる史料を取り上げて、演習形式で輪読を行う。本授業では主に、村や町で作成された「御用留」を取り上げる。受講者には、史料を解釈する能力の習得と共に、地域の視点から歴史を描く方法論の理解を求める。	2	
日本地域文化史特論演習Ⅱ	歴史学は、過去の事象を史料を用いて解明しながら論理的に説明する学問である。そのためには、史料の読解能力、特に正確に解釈する能力が不可欠である。さらに、現在の個別細分化された研究状況においては、地域の具体的な事例から歴史の全体像に迫ることが重要となってくる。そこで、日本史の史料の中から、特に地域史・文化史に関わる史料を取り上げて、演習形式で輪読を行う。本授業では主に、百姓や町人の日記を取り上げる。受講者には、史料を解釈する能力の習得と共に、地域の視点から歴史を描く方法論の理解を求める。	2	
ヨーロッパ社会文化史特論Ⅰ	ヨーロッパの前近代は現代日本とはあらゆる点で前提が異なる社会であるが、この社会について学ぶことで、ヨーロッパ社会をより深く理解し現代日本の社会・文化を相対化することが可能となる。本講義では、近年の「社会史」・「文化史」の主要な研究成果を取り上げつつ、ヨーロッパの前近代の主要なトピックについて「社会史」・「文化史」の観点から講義する。主に、宗教と社会との関わり、身分制、異文化圏との接触・交流といったテーマを取り上げる。	2	准教授 鍵和田 賢
ヨーロッパ社会文化史特論Ⅱ	近現代のヨーロッパは、現代日本に直結する社会・文化的課題が登場した社会である。本講義では、近現代ヨーロッパの主要なトピックについて、「社会史」・「文化史」の観点から講義する。前近代に比して資史料が豊富に残されている近現代については、人々の社会文化的生活を個人レベルで再構成することも可能であることから、一次史料の読解なども取り入れて講義する。主に、ヨーロッパ近現代史における革命、民族、人種、ジェンダー、家族といったテーマを取り上げる。	2	

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
ヨーロッパ地域文化史 特論演習Ⅰ	ヨーロッパにおける「地域文化」の歴史について日本で学ぶ意味は、われわれとは異なる「地域」概念や日常生活のあり方について知ることを通じて、われわれ自身の地域・生活観を反省的に見つめ直すことにある。本講義では、ヨーロッパ前近代における人々の地域における日常生活のあり方を、「日常生活史」の主要な研究成果を取り上げつつ講義する。主に、古代ギリシア・ローマ、および中世ヨーロッパにおける食と住まい、労働と娯楽、旅と交通といったテーマを取り上げる。	2	准教授 鍵和田 賢
ヨーロッパ地域文化史 特論演習Ⅱ	本講義では、近現代ヨーロッパについて、「地域文化」の観点から講義する。食と住まい、労働と娯楽、旅と交通といったテーマを近現代について論じていくが、近現代においては「国民国家」の登場に伴い、「地域主義」の目覚めや「中央」と「地方」の相克など「地域」をめぐる諸問題が重要視されるようになる。本講義では、「日常生活史」に関わるトピックとともに、そのような「地域主義」の問題も取り上げていく。	2	
自然災害特論Ⅰ	本講義では自然災害のうち地震災害と火山災害について主に扱う。プレートテクトニクス運動によって地殻変動が著しい日本において、1. 日本周辺の地殻構造と地震発生と火山噴火の関係、2. 地震ならびに火山噴火の発生タイプとメカニズム、3. 地震・火山噴火観測の概要と予知の現状、4. これまでの主な地震災害・火山災害の歴史、5. 災害対策の現状に関して、最新の論文を輪読しながら受講生と議論をしつつ講義を進めていく。	2	教授 中村 洋介
自然災害特論Ⅱ	本講義では自然災害のうち、風水害と土砂災害について主に扱う。台風の通り道になっており洪水や斜面災害が発生しやすい日本において、1. 日本周辺の気圧配置と気候の特徴について、2. 地球温暖化に伴う風水害被害拡大の概要、3. 気象観測の概要と予報の現状、4. これまでの主な豪雨災害・土砂災害の歴史、5. 災害対策の現状に関して、最新の論文や専門書等を輪読しながら受講生と議論をしつつ講義を進めていく。	2	
環境地理学特論演習Ⅰ	地域防災に関わる土地環境要素（活断層・火山）について、その調査法を習得するため、自然地理学に関する室内実習ならびに現地観察を行う。本講義では福島盆地断層帯における活断層地形や吾妻火山について、室内での空中写真判読で地形分類を行った後に実際に現地に行き、スケッチや測量ならびに土地利用などに関する野外調査を行う。さらにその調査結果をもとに報告書を作成し、自然地理学における一連の野外調査法を学ぶ。	2	
環境地理学特論演習Ⅱ	地域防災に関わる土地環境要素（地すべり・軟弱地盤）について、その調査法を習得するため、自然地理学に関する室内実習ならびに現地観察を行う。本講義では福島盆地内における地すべり地形や軟弱地盤を実際に把握するために、室内での空中写真判読で地形分類を行った後に実際に現地に行き、スケッチや測量ならびに土地利用などに関する野外調査を行う。さらにその調査結果をもとに報告書を作成し、自然地理学における一連の野外調査法を学ぶ。	2	
地域と文化特論Ⅰ	本授業では、人文地理学・文化地理学的な観点から、主として地域における文化の存立基盤について検討を加える。具体的には、文化に関する概念や人間の文化習得についての理論的な検討と既存の研究の批判的検討の後に、「まつり」と「伝統工芸」を取り上げ検討を深める。まつりは地域社会と密接な関係を持って存在し、地域によって支えられるとともに、地域を支える役割も果たしている。本授業では地域の社会構造に注目しながら、その点を構造的にとらえていきたい。一方、伝統工芸はその地域の文化的な存在であるとともに経済的な存在でもある。ここでは主に製作に焦点を当て、その文化意識が産業にどのような影響を与えるのかを考察する。それにあたっては、文化的側面に注目しつつも、経済的側面にも視野を広げ、その存続基盤について検討する。	2	教授 初澤 敏生
地域と文化特論Ⅱ	本授業では、人文地理学・文化地理学的な観点から主として地域における新しい文化的事象について検討を加える。具体的には、地域の食文化（伝統的食文化だけではなく、B級グルメなどの現代的な食文化も含む）やそれらを活用した地域振興など、文化を活用した地域づくり・まちづくりなど、現代文化を中心に、現代の地域において文化が果たしている役割について検討する。	2	
地域復興・振興特論演習Ⅰ	本授業は、人文地理学における近年の研究成果に基づく課題分析と、それをもとにした院生によるケーススタディから成る。まず授業前半部において主に経済的側面からの地域振興の現状と課題について考察を加える。ここでは、グローバルとローカルをつなげる視点を常に持ち、具体的な事例の検討を通して検討を深める。授業中盤においては、これらに関する具体的な事例も挙げながら、研究視点を深化させる。これを受け、院生が調べた事例を紹介するとともに、その実践について批判的に検討し、討議を深める。これを通して院生の地域振興とまちづくりに関する考察を深める。	2	
地域復興・振興特論演習Ⅱ	本授業は、人文地理学における近年の研究成果に基づく課題分析と、それをもとにした院生によるケーススタディから成る。まず授業前半部においては主に地域づくりについて取りあげる。ここでは、Ⅰで取り上げたような経済的な視点の他、社会・文化的視点、それを支える市民の視点などにも必要になる。授業中盤においては、これらに関する具体的な事例も挙げながら、地域づくりに関する視点を深化させる。これを受け、院生が調べた事例を紹介するとともに、その実践について批判的に検討し、討議を深める。これを通して院生の地域振興とまちづくりに関する考察を深める。	2	

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
観光産業特論Ⅰ	本授業では、経済学的な観点からさまざまな観光産業や観光施設、観光政策などを取り上げ、分析を加える。観光産業・観光施設等は観光資源の特性によってその性質を大きく変化させるため、本授業を進めるにあたっては、特に観光資源に着目し、類型化しながら検討を進める。また、観光政策面に関しては、特に東日本大震災後のさまざまな観光復興政策やCOVID-19に対応した振興策が地域の観光産業にどのような影響を与えたか、などについて検討する。	2	教授 初澤 敏生
観光産業特論Ⅱ	本授業では、経済学的な観点から、主に修学旅行を中心とする教育旅行を対象として、分析を加える。教育旅行は教育目的に沿って行われるため、観光旅行の中でも特徴的な性格を持つ。その一方で、団体旅行として規模が大きいことから、産業面からも無視できない市場を形成している。本授業では修学旅行に関する目的意識の変化が旅行先の選択に与える影響や東日本大震災後の被災地を対象とした修学旅行の変化、COVID-19が修学旅行の地域構造に与えた影響などを取り上げて分析を加える。	2	
地域経済特論演習Ⅰ	本授業では、経済学的な観点から地域経済の研究方法をとらえた上で、主に第一次産業（農・漁業）と第三次産業（商業・サービス業）を取り上げて地域の中での産業の位置づけや特性を演習形式で学修する。農・漁業に関しては、産地形成や資源管理など、地域的な生産体制が重要な役割を果たす。地域的な視点から経済を分析する。また、商業・サービス業は産業と地域が密接に結びついており、地域の構造変化が直接産業の変化に結びつく。学修にあたっては、論文購読を行った上で、各種の統計資料を用いて地域経済分析を行う。	2	
地域経済特論演習Ⅱ	本授業では、経済学的な観点から地域経済の研究方法をとらえた上で、主に第二次産業（製造業）を取り上げて地域の中での産業の位置づけや特性を演習形式で学修する。製造業は各業種の生産構造的な特性と、地域の産業基盤の特性を組み合わせながら、その存立基盤を形成している。生産構造的な特性は全国レベル（あるいは世界レベル）の空間構造を形成し、地域的な産業基盤は市町村レベルでのローカルな構造を持つ。学修にあたっては、論文購読を行った上で、各種の統計資料を用いて地域経済分析を行う。	2	
コミュニティ文化特論Ⅰ	高度成長期の工業化・都市化・大衆化、そして1980年代以降の情報化・高齢化・グローバリゼーションの進行によって、日本の地域社会は構造的な変化を経験し、一方で解体・再編が進むとともに、他方ではコミュニティとしての再形成の動向がみられるようになった。この授業では、社会学の視点と方法により、地域社会の変容を実態に即してあつづけるとともに、その社会・文化・意識構造の今日の特質を描出する。	2	教授 牧田 実
コミュニティ文化特論Ⅱ	この授業では、コミュニティの担い手（＝主体）に注目し、コミュニティ文化の日本的特質を明らかにする。具体的には、地縁型組織である地域住民組織とテーマ型組織であるNP0・市民活動団体の組織と活動の特徴を描出するとともに、これら2つの組織間の連携およびこれらと行政との協働の実態を論じ、形成途上にあるコミュニティの文化的特質を明らかにする。	2	
コミュニティ形成特論演習Ⅰ	この授業では、戦後日本における地域社会の解体・再編を踏まえつつ、これに対する再組織化の動向をコミュニティ形成の文脈で捉え、その主体的・構造的条件を社会学の視点と方法により明らかにする。具体的には、国によって提起されたコミュニティ政策の背景と展開過程、および地域での実践を捉え返し、その成果と課題を今日的視点から検証する。	2	
コミュニティ形成特論演習Ⅱ	この授業では、今日のコミュニティ形成および住民による主体的なまちづくりの動向に注目し、国内外の事例を紹介しつつ、まちづくりの意味と可能性について論じる。また、まちづくりをコミュニティ・レベルでの地域自治の実践として捉える立場から、これを制度的に保障するコミュニティ政策のありようについて検討を加える。	2	
人間開発の倫理学特論Ⅰ	「人間開発」とは、教育的な場面においては、人材育成や人間発達支援を意味する語である。育てる者と育てられる者という上下関係の中での営みにおいてはパターナリズムの危険性が生じる。パターナリズムとは、親が子どもの幸せを考え子どもにとっての最善を判断し、やっとなげることであり、子どもが小さいうちは絶対に必要な営みであるが、子どもが大きくなるにつれて、子どもにとっては自由の侵害となる可能性も生じてくる。そもそも教育は、育てられる側が自立して自由な存在者となることを目的とするものと思われるが、教育という行為には多かれ少なかれ強制的な要素が含まれており、そこには自由と強制のパラドクスが発生してしまう。自由な主体を育成する人間発達支援の難しさ、そのあるべき姿について、文献講読や討論を通して徹底的に考えてもらう。	2	教授 小野原雅夫
人間開発の倫理学特論Ⅱ	「人間開発」とは、倫理学や政治・経済学の場面においては、弱者（開発途上国なども含む）の援助・支援を意味する。援助や支援は長いあいだ不完全義務と位置づけられ、自立や自治の尊重という完全義務よりも優先度の低い課題とみなされてきたが、近年では構造的暴力が問題視されるようになってきたことに伴い、たんなる善意による不完全義務にのみ任せておけばよい問題ではなく、根本的な対処が必要な完全義務と見なされるようになってきている。弱者支援の問題点と、そのあるべき姿について、文献講読や討論を通して徹底的に考えてもらう。	2	

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
共生の倫理学特論演習Ⅰ	人権について理解を深め、多様な価値観をもった人々が互いの違いを尊重し合いながら共生していくことの困難さと意義を実感してもらい、そのための具体的な手法を学んでもらう。人権には自由権、参政権、社会権、平等権や、その他の新しい人権など、様々な内容が時代とともに付け加わってきたが、それらは容易に両立しうるものではなく、互いに相克しあう複雑な関係を成している。対等な立場で語り合っていく哲学カフェの「対話のルール」を身に付けてもらった上で、人権に関わる様々なテーマについて哲学カフェを行いながら、理論と実践の両面から共生に向けたトレーニングを積んでいく。	2	教授
共生の倫理学特論演習Ⅱ	多様な価値観をもった人々が互いの違いを尊重し合いながら共生していく様々な手法を学んでもらうとともに、自ら新たに開発してもらい。具体的なトラブルが生じたときに非暴力コミュニケーション等を用いて紛争を解決していく平和的手法や平和的態度を身につけ、またそれらを指導するファシリテーションの技法についても学んでもらう。また、非暴力トレーニングなども学び、身近なところで生じる争いにどう対処するか、あるいは紛争地帯における暴力的状況のなかでどんなことができるかなどをシミュレーションしてもらった上で、新たな共生の手法を協働的に開発していく。	2	小野原雅夫
食品科学特論	食品には大きく3つの機能（栄養機能、嗜好機能、生体調節機能）がある。本授業では、それらに関わる食品成分の化学的性質、機能性について、その背景にある研究論文等をもとに専門的な理解を深め、農産物から食品を科学的視点から捉えることを目的とする。具体的にそれぞれの機能を有する食品を例に取り上げ、社会的背景（消費者ニーズなど）、化学的性質、機能のメカニズム、その食品の意義（商品コンセプト）などに関連する文献等を活用しながら学ぶ。	2	教授
食物学研究	食物学に関する研究の新しい知見や今後の課題を自ら見出ししながら、研究の全体像を捉えることをねらいとする。また、社会的な食品の課題へのつながりを見通すことをめざす。本授業では、食物学分野の文献、特に健康機能に関わるものを講読し、それをもとに内容についての解説と議論を行う。議論を通して、食物学分野の研究の背景や課題、手法などの理解を深めるとともに、現代の社会生活における食品に関する課題への関連や発展性を考える。	2	熊谷 武久
食生活特論	本授業では、受講生の興味や関心・修了研究のテーマ・修了後の進路などを勘案しながら、現代の日本の食生活における諸問題を授業テーマに設定する。最近の調理科学・食物学における話題等を入れながら、授業は主として講義形式ですすめるが、学生同士や教員とのディスカッションも適宜取り入れる。簡単な実習および実験を取り入れる場合もある。	2	教授 中村 恵子
食生活支援研究Ⅰ	本授業では、学生各自で食生活支援をする対象（幼児から高齢者）と場面（具体的な地域や立場）を設定する。実践事例研究や文書講読、実地調査等を行って、その地域における特徴的な農林水産物・郷土料理・食文化を発掘し、対象者特有の食生活上の問題や課題を整理して、各自の食生活支援プログラムを作成する。発表や討論を経て、レポートにまとめる。Ⅰでは主として食事や健康に関する内容を扱う。	2	
食生活支援研究Ⅱ	本授業では、学生各自で食生活支援をする対象（幼児から高齢者）と場面（具体的な地域や立場）を設定する。実践事例研究や文書講読、実地調査等を行って、その地域における特徴的な農林水産物・郷土料理・食文化を発掘し、対象者特有の食生活上の問題や課題を整理して、各自の食生活支援プログラムを作成する。発表や討論を経て、レポートにまとめる。Ⅱでは主として、食文化や食育に関する内容を扱う。	2	
衣生活特論	現代社会には、一人ひとりの生活の質の向上のためには衣生活に関わる多くの課題があり、その解決が求められている。本授業ではそれらの課題解決に資する知識を習得することをめざす。明治時代以降、現代にいたるまでの衣生活の変容について、衣服生産、衣服の流行と選択、衣服産業の課題等を中心に解説する。さらに、持続可能社会の形成およびユニバーサル社会形成のために、これからの衣生活のあり方について検討する。	2	教授 千葉 桂子
衣生活支援研究Ⅰ	自立した生活をめざす上で、衣服の選択や着装などは個人のアイデンティティに深く関わっている。本授業では、自立した衣生活とそれを支援するために必要な知識・技術について習得するために、関連資料の調査、文献講読等により検討する。さらに子ども、高齢者および障害者を対象として衣生活の実態をとらえて課題を分析し、具体的な支援の方策について検討する。それらを通して支援のための具体的なプラン作成をめざす。	2	
衣生活支援研究Ⅱ	本授業では、持続可能な社会形成に資する衣生活支援に必要な知識・技術を、基礎的なものから、より実践的なものとして展開させ習得するために、関連資料の調査、文献講読等により検討する。衣服生産～廃棄および再利用・再利用における問題点を把握し、分析する。さらに、地域における衣生活の実態をとらえて課題を分析する。それらを踏まえて衣生活支援の実践例を検討し、具体的な支援方法についてプランの作成をめざす。	2	
家庭科教育特論	小・中学校を主とした家庭科の授業実践研究を題材、指導、評価等の視点や家庭生活と地域・社会の関連から分析できるようにする。家庭科教育における自立・自律ならびに共生をテーマに、意思決定能力、コミュニケーション力、生活経営力等、生活をよりよくする力を育成し、主体的・対話的で深い学びを実現する学習指導のあり方、教材、評価等について探究する。また、生涯を見通した主体的な生活者の育成という現代的なニーズへの対応と家庭科教育のあり方についても考察する。	2	教授 角間 陽子

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
家庭科カリキュラム特論 演習	家庭科教育における自立・自律ならびに共生を中心としたカリキュラム研究を通して、意思決定能力、コミュニケーション力、生活経営力等、生活をよりよくする力を育成し、主体的・対話的で深い学びを実現するための教材開発を行う。生涯を見通した主体的な生活者の育成という現代的なニーズに対応するための家庭科教育の課題を明らかにし、児童・生徒の発達、生活の問題解決や地域との協働に即した教材が開発できるようにする。	2	教授 角間 陽子
生涯生活マネジメント特論	人生100年時代を迎えた現代社会では、65歳以上を一律に受動的な弱者でありケアを受ける存在として捉えるのは妥当ではない。クリティカル思考により意思決定し、生活を主体的に選択・構築し、生涯にわたってアクティブ・エイジングが実現できる個人のあり方とその生活について追究する。自分らしく主体的に生きるためのライフロング・マネジメント・スキルを修得するとともに、そのスキルをもった人材の育成、他者の生活や地域・社会を支援する方法についても学ぶ。	2	
家庭科教育実践研究Ⅰ	小・中学校家庭科の教育および実践について追究するために、授業参観や実践記録の視聴、実践報告や先行研究等の文献講読を通して、題材計画や学習指導のあり方、教材、評価等を整理・分析し、課題や展望についての検討を行う。15回のうち5回は教科専門科学の理論と学習内容との関連についての理解を深める。さらに家庭科の本質や意義を踏まえ、生活課題の解決を図り実践するための主体的・対話的で深い学びを実現する教育および実践について、ICTの活用、小・中学校の系統性や接続性を含めて考察する。	2	角間 陽子 千葉 桂子 中村 恵子
家庭科教育実践研究Ⅱ	中・高校家庭科の教育および実践について追究するために、授業参観や実践記録の視聴、実践報告や先行研究等の文献講読を通して、題材計画や学習指導のあり方、教材、評価等を整理・分析し、課題や展望についての検討を行う。15回のうち5回は教科専門科学の理論と学習内容との関連についての理解を深める。さらに家庭科の本質や意義を踏まえ、生活課題の解決を図り実践するための主体的・対話的で深い学びを実現する教育および実践について、ICTの活用、中・高校の系統性や接続性を含めて考察する。	2	

○スポーツ・芸術文化コース

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
身体教育とスポーツ文化 特論	本講義では、身体教育、スポーツ文化について理解を深めるとともに、身体教育とスポーツ文化との関連性について考察していく。スポーツを教材とした身体教育のあり方や、様々なスポーツ文化の教育的意義を踏まえたスポーツ指導のあり方について、テキストや資料をもとに論究する。具体的にはテキストや資料を読み進め、受講生が要点をまとめて説明した上で、教員からの内容確認の質問に答えていく形式で進める。	2	教授 小川 宏
現代スポーツ特論演習	本演習では、現代社会におけるスポーツの様々な話題や問題について受講生がローテーションで話題提供し、現代スポーツに対する考え方についてディスカッションを行い理解を深める。現代社会におけるスポーツ指導のあり方や、各スポーツの現代的特徴、レクリエーションスポーツの今後の方向性など、できるだけ広い視野から現代スポーツの特徴を捉えていく。そして将来スポーツの現場に立ったときに、正しい判断と対処ができる指導者を育成していく。	2	
スポーツ社会政策特論	現代のスポーツは、単にスポーツそのものの振興だけを担えばいいという時代は終わり、様々な社会問題の解決の一翼を担う、極めて社会的な存在へと進化した。そこで、国、都道府県、市区町村の三つのレベルから現代社会におけるスポーツ政策の重要性と理念を理解し、現代のスポーツ振興について解説していく。さらに、諸外国のスポーツ・健康政策についても触れ、今後、スポーツおよび健康政策を企画立案できる人材の養成を目指す。	2	准教授 蓮沼 哲哉
スポーツクラブマネジメント特論演習	プロ・アマ問わず、スポーツクラブが自主独立し健全に発展するためには、人材、施設、財源、広報など、効果的なマネジメントが不可欠となる。そこで、本演習では、国内外のスポーツクラブを事例に取り上げ、マネジメントするために、組織運営、経営方法、地域のマネジメント、マーケティング、施設管理、イベント管理、顧客管理等の知識を解説していく。そして、スポーツ組織・団体をマネジメントすることができる人材の養成を目指す。	2	
スポーツ医科学特論	アスリートは自身の能力を最大限高めることで、高いパフォーマンスを発揮するために日々トレーニングしている。トレーニングにより疲労し、休養をとることで疲労が回復する。このサイクルが不適切になると、身体的諸問題が発生する。これは、アスリートのみならずスポーツ愛好家や健康の維持・増進を目的とした運動実践者においても起こりうる。本講義では、これらの身体的諸問題やその予防のための考え方などについて論究する。	2	准教授 杉浦 弘一
健康科学と運動処方特論	健康の維持増進、および生活習慣病の予防にとって、日常生活における身体活動量の確保は非常に重要である。本講義では健康に対する考え方、身体活動量の評価、健康と運動（または身体活動）、生活習慣病と運動、健康の維持増進のための様々な取り組みについて、理解を深める。そして、健康の維持増進に欠かすことのできない運動をどのように処方すべきかについて、健康（健康科学）と運動の効果の観点から概説する。	2	

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
スポーツバイオメカニクス特論	本講義では、バイオメカニクスの測定・分析方法を学ぶとともに、ヒトの運動を理解するためのバイオメカニクスの基本的知識および「走る」「跳ぶ」「投げる」などの基本的な運動のメカニズムに関する知識をもとに、データを理解する能力を習得することを目的として、実験実習を取り入れながら授業を展開する。さらに、実際のスポーツ現場への応用方法について、ICTの活用と関連づけて考えていく。	2	准教授
運動学特論	本講義では、運動を習得し、修正し、自動化するまでの運動習得・習熟過程について理解することを目的として授業を展開する。受講学生自身の経験を振り返り、考えることで、理解を深める。さらに、運動指導においては、指導者は学習者の運動の微妙な違いを瞬時に評価するための「運動を見抜く力」や「運動共感能力」が求められるため、運動観察について知識を学ぶとともに、演習を通して運動観察力を身につけることを目指す。	2	本嶋 良恵
運動生理学特論	本講義では、大学で学んだ（運動）生理学の知識を基礎として、より深化発展させた内容を行う。運動・トレーニングによる生体の反応、適応変化を遺伝子レベルから個体レベルで考察できるようになることを目的とする。具体的には、運動時の遺伝子・タンパク発現と情報伝達系の変化、健康や運動パフォーマンス向上に関係する細胞内情報伝達系、筋の萎縮と肥大、等のテーマについて学ぶ。講義は理論を基礎とするが、理解を助けるために必要に応じて実験実習を行う。	2	教授
健康指導特論演習	本講義では、運動が生体に与える影響について基礎的知識を総括した後、運動パフォーマンス向上および健康の維持増進のためにどのような運動が適切であるのかについて学ぶ。最近の研究成果を知るために運動生理学を中心とした論文を読む。また実験実習を通じて運動に伴う生体の反応について測定し、健康運動指導やコーチングに必要とされる測定方法、評価について学習する。講義、実習の成果をレポートにまとめ理解度を確認しながら進める。	2	安田 俊広
武道文化特論	武道は闘争を起源にもつ伝統的日本の運動文化である。歴史の過程で仏教や神道、道教、儒教の影響を受け成立したものであり、独自の運動学習論が展開されている。その独自性を修行、道ととらえ、そこから派生した稽古や型の考え方等の独自な精神性を論じ、さらに、武道の国際化についてもふれる。これらを通して、武道の歴史や精神性等を学習し、武道の独自性を理解することを目的とする。	2	特任教授
武道文化特論演習	本講義は、日本の伝統的運動文化である武道の伝書を中心に講読する。風姿花伝は能楽の伝書であるが、その運動学習理論は武道の源流をなす。不動智神妙録は、禅宗の考え方から剣術の技術をとらえたものである。兵法花伝書、五輪書、一丁斎先生剣法書は三大武芸伝書といわれ、流派の精神を説いたものである。猫の妙術と天狗芸術論は、剣術を老荘思想で説いたものである。これら伝書に加え、武道に関する論文を講読することによって、武道の特性を理解することを目的とする。	2	竹田 隆一 (令和7年度担当)
保健体育科教育特論	授業の「計画－実践－評価」という授業づくりの構成要素を理解する。計画段階では、教材づくり、単元計画ならびに1単位時間の指導計画の立案、学習資料の作成などを行う。実践段階では、立案した授業計画にもとづいてマイクロティーチング（仮想模擬授業）を実施し、授業運営や相互作用行動などを実践的に学習する。評価段階では、体育授業観察者チェックリストおよび形成的授業評価、授業場面の期間記録法などの組織的観察法を用いた授業分析にも取り組む。	2	准教授
保健体育授業づくり特論	学校（小学校・中学校・高等学校）現場での体育科・保健体育科の授業を参観し、組織的観察法などを用いながら授業分析を行うとともに、模擬授業を立案・実践することを通して、保健体育科教師としての指導力向上ならびに実際の教科の授業や学級経営のあり方について学修する。また学校現場の先生方との交流を通して、学校現場の実態や保健体育教師とはどうあるべきかなどについて深く考えていく。	2	松本 健太
現代器楽演奏演習	器楽領域における楽器の発達史を踏まえ、その時代的な楽器の様相や特徴をとらえるとともに、それらを演奏史の流れの中に位置づけながら理解する。西洋音楽の歴史における4つの代表的な時代様式について、その特徴を端的に理解するとともに、楽器の発達史に現れる事象との相関関係についても多角的に探究し、現代的な視点をとおして文化としての音楽芸術を鋭く探究する。	2	
器楽演奏特論演習	「現代器楽演奏演習」で扱った理論的な内容をもとにしながら、音楽芸術における作品解釈法ならびに具体的な演奏表現技法について研究する。作品に記された音を手がかりに、作品の世界を探究しながら、器楽領域における具体的な解釈法・演奏法を検討する。また、アンサンブルの視点をまじえながら、伴奏法について探究する。	2	教授 中畑 淳
アンサンブル特論演習	音楽表現は感性のひらめきにより修飾されるが、その根幹では作品の姿と演奏表現・作品解釈との間に一定の相関関係が存在する。このことを理解するとともに、演奏表現法のみならず地域における芸術文化の振興育成にたずさわる指導者をそだてるべく、演奏指導法としてもとらえなおす。これらのことを通じて、アンサンブルにおける演奏家と教育家を育成することを目指す。	2	

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
現代声楽演奏特論演習	本授業では、日本歌曲の演奏を通じて、日本語演奏の表現法を研究する。また、馴染みの薄い邦人作曲家の作品を演奏することを通して知見を深め、今日の我が国におけるクラシック音楽のあり方について考える。授業は演奏実践と作曲家および詩人についての研究および作品についての考察を発表し、ディスカッションを通じて理解と作品に対する洞察力を養い、成果を演奏に還元することでより高いレベルの演奏を目指す。	2	教授 今尾 滋
声楽演奏特論演習	本授業では、学類の科目で触れることのできなかった、ロマン派後期から近現代の声楽曲を、西欧諸国のものを中心に学ぶ。方法論としては演奏実践と作品・作曲家・詩人についての調査発表を授業の両輪とする。調査発表については授業内でディスカッションを行い、それを通して洞察力と知見を身につけ、成果を演奏に還元することでより高いレベルの演奏を目指す。教材については芸術歌曲を中心とするが、オペラアリアや宗教曲のアリアなども排除しない。	2	
オペラ特論演習	本授業では、モーツァルトのオペラを中心に、オペラのアリアやアンサンブルの演唱法を学ぶ。西欧で育まれたオペラを演唱するためには、我が国とは異なる文化や生活様式の理解が不可欠である為、それを解明しつつ、演唱を構築する。劇音楽とは何かを体験しつつ、彼我の大きな差異を理解することで、異文化理解につなげてほしい。実践が中心となるが、映像の鑑賞も時間の許す限り行う。また声楽の盛んな福島県という地域の実態に鑑み、様々な方法で地域オペラについて研究する。	2	
音楽メディア創造演習	本講義では、今日、音楽作品創作の専門的研究において求められる様々なメディア（楽器、情報機器、プレゼンテーション・発表に必要な多様なメディアなど）を利用し、作曲法や楽器法（編曲法を含む）の研究を行う。時として、個々の受講生の能力・関心・必要性に応じた課題を設定する。また、この授業を通じて、多様なメディア利用による作品研究、またそれに関する著述なども、研究の対象とする。この研究によって、より現代の社会・文化に対応する表現のあり方を考察する。	2	教授 横島 浩
作曲特論演習	本演習では、音楽メディア創造研究において強く関心を呼び起こした研究課題を更に深化させ、自らの作品に発展すべく、自己の音楽の語法の確立を指向する。その過程で過去の様々な作家の作品を研究し、また彼らの語法の研究も行う。また、音楽以外の幅広い領域への関心を広げ、作品の創作へ導入あるいは、そうした多領域の表現における創作のあり方を研究し、幅広い視点に立った創造の世界への可能性を追求する。	2	
現代指揮法演習	本講義では、指揮法における基礎的な技術の基盤の上に、古典から現代にまで至る様々な作品を指揮法の観点から、研究する。取り扱う編成としても、オーケストラ作品、合唱作品、アンサンブル、コンピュータを利用した現代的作品を含んだ幅広いものを扱う。また、欧米の作品のみならず、邦人による作品、伝統楽器などを含んだ作品を扱う。そのため、作品の内容の分析はもとより、楽器や使われるメディアに関する研究も行われる。また、指揮の活動として求められるアレンジも扱う。	2	
音楽科教育特論	音楽科教育に関する研究方法論について、概要を把握する。授業研究の方法について、質的・量的研究双方について学習する。音楽科教育の歴史、思想・哲学、教材論について、学術論文や著書を手掛かりとしつつ、批判的に検討する。音楽科学習指導要領について、ICTの活用やアクティブラーニングを中心に理解を深める。ポピュラー音楽の教材化を議論することで、今日的な学校音楽教育の有する可能性と課題について考究する。比較対象として、北欧の音楽教育やコミュニティ音楽療法も取り上げる。	2	教授 杉田 政夫
音楽科カリキュラム特論演習	日本における音楽科カリキュラムの構成原理の変遷について俯瞰した上で、現行の音楽科学習指導要領をカリキュラム論の視点から検討する。とりわけ重視されている協働的な学習、ICTの活用について、実践事例を取り上げながら考察を深める。続いて欧米やアジアなど諸外国との比較を通し、日本の音楽科カリキュラムの特有性を分析する。次に、音楽科教育におけるカリキュラム研究の系譜について概観する。近年主流となりつつある「多様な音楽」を扱う音楽科カリキュラムの意義と課題について検討する。	2	
音楽科教育実践研究Ⅰ	音楽科授業の観察方法について授業映像を視聴しながら学習する。次に、本学の附属小学校・中学校の学校公開で扱われる楽曲について教材研究や分析を行う。研究授業の指導案を検討した上で、参与観察を行う。その際、音楽科学習指導要領に基づき協働的な学習やICT機器がどのように効果的に活用されているかにも注目する。授業者を交えた事後検討会での意見交換、および大学での議論を通して、音楽科授業実践の在り方や可能性、今後の課題について考察する。	2	
音楽科教育実践研究Ⅱ	本学附属小中学校の学校公開用の教材楽曲や指導案の分析、検討を行った上で、参与観察に臨む。授業者を交えた事後検討会に参加し、また大学での検討会の議論を通して、音楽科授業実践のあり方について、目的、内容、方法、評価の視点から検討する。さらに音楽科学習指導要領とも関連付けて授業を分析し、その意義や有効性について検証する。その際、協働的な学習やICTの効果的な活用にも着眼し、今後の音楽教育実践の在り方を考究する。	2	

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
絵画特論	絵画の近代以降の系譜を検証し、美術制作学、美術科教育の視点からその構想について分析、考察する。併せて絵画表現の特質を理解し、現代における絵画表現と造形教育の関わりを深く追求する。具体的には、個別に設定したテーマに沿って、絵画の制作理論に関する英文の翻訳を行い、絵画制作の主題、絵画の重層構造、技法や歴史的な問題について、現代の視点から再検討を行う。また絵画における教材研究の新たな可能性についても検討する。	2	教授 渡邊 晃一
絵画特論演習Ⅰ	絵画および現代美術に関して、個別に設定したテーマに沿って制作を行い、自身の制作について深く研究する。具体的には、テンペラを実制作する中で、材料の基本的な事項を獲得し、絵画のタブロー制作についての基礎概念を習得する。また西洋絵画と日本の伝統絵画等の比較や、絵画材料や技法の写真表現との比較検討等を行うなかで、制作学や美術教育学との関わりについても提起していく。	2	
絵画特論演習Ⅱ	版表現の近代以降の系譜を検証し、美術制作学、美術科教育の視点からその構想について分析、考察する。併せて版表現の特質を理解し、現代における版表現と造形教育の関わりを深く追求する。具体的には、個別に設定したテーマに沿って、版の制作理論に関する表現の技法や歴史的な問題について、現代の視点から再検討を行う。また、絵画における教材研究の新たな可能性についても検討する。	2	
絵画特論演習Ⅲ	絵画の主題（I）、材料（M）、表現技法（T）との関係から、自身の作品をブレインストーム等を用いて入念に検討し、自身の研究に最も適した作品と理論を確立する。絵画における国際的な現況や、絵画教育に関わる諸相、歴史的背景と重ねて、絵画の理論、背景を位置づけるとともに、制作学や美術教育学との関わりについても提起していく。	2	
彫刻特論	彫刻特論の授業では、現代における彫刻の動向を学ぶとともに、パブリックアートに関する歴史的、物理的、社会的環境について学習を深めていく。前半では現代の彫刻の動向を複数の作家を取り上げて制作動機、表現、背景を理解していく。後半では明治大正期の彫刻設置と、1960年代以降の公共事業における1%システム事業に焦点を当て、各種環境との影響関係の概略を整理する。彫刻とその設置について調査研究することで、表現に活かすとともに、社会と芸術のありかたについて考察を深めていく。	2	未定
彫刻特論演習Ⅰ	彫刻特論演習Ⅰでは、現代における彫刻表現の動向を踏まえ、制作を通して自身の表現の位置づけを探る。特に野外彫刻の具体的作例をもとに、制作動機、表現、背景への理解を深め、自身の制作の振り返りを行う。パブリックスペースにおける彫刻設置は、数多くの課題を克服することが要求されている。授業では入念な検討をもとに、彫刻の本質的な造形技法を駆使しながら新たな提案に結び付けるとともに、図工・美術科の造形遊びや立体表現指導に活かせるよう学びを深める。	2	
彫刻特論演習Ⅱ	彫刻特論演習Ⅱでは、演習Ⅰでのパブリックアートに関する成果をもとに自身の制作にフィードバックさせ表現の造形的側面をさらに高めていく。Ⅰで学んだパブリックアート成立の背景を表現に活かしながら表現の造形的側面を高めることで、表現としての普遍的な強さを得ることにつなげていく。特に材料の扱い、量、面の具体的イメージの醸成、比率、リズム、バランス、アクセント等の具体的効果を検証する力量を高めていくことで、自身の表現能力を高めるとともに図工・美術科の指導に活かす方法を考察する。	2	
彫刻特論演習Ⅲ	彫刻特論演習Ⅲでは、現代美術の重要な表現であるサイトスペシフィックな表現を学び、自身の表現や社会と芸術の関係について考察を深めていく。今日のサイトスペシフィックの概念では、表現は必ずしも造形的側面ばかりが強調されてはいない。それを踏まえつつも授業では造形的良さを備えたサイトスペシフィックな表現を、制作を通して模索することで、既習事項を活かす方策を探究する。それらの探究を社会と芸術の関係や造形教育と芸術表現の関係を紐解く力量につなげていく。	2	
日本美術史特論	海外でも人気が高い日本美術のジャンルといえば、それは浮世絵であろう。人々の生き生きとした姿を描写した浮世絵は、当時の社会・風俗を映し出す鏡でもある。また、その平面性や色づかい、斬新な構図はヨーロッパの印象派の画家たちに大きな影響を与えた。本講義では、17世紀から19世紀にわたる浮世絵の誕生と発展、ならびにそれぞれの絵師の特色を解説する。さらに、浮世絵版画の技法や販売方法について説明する。	2	准教授 加藤奈保子
西洋美術史特論	世界中から観光客を惹きつける「永遠の都」ローマは、17世紀にはすでに現在の姿に近いものとなっていた。本授業では、当時のローマを中心とした視覚芸術（絵画・彫刻・建築）を概観し、様式の特徴を解説する。同時に、それぞれの芸術家の活動の様態、ならびに彼らが生み出した作品と17世紀ローマの社会・文化・宗教との関わりについて考察していく。さらに、近代社会へ移行しつつあった時期のパトロネージ、美術市場の在り方に検討を加える。	2	
美術科教育特論	学習指導要領における重要事項、改訂事項を踏まえながら、美術教育の表現領域の課題を明らかにし、幼稚園・小学校・中学校における授業実践研究を通して、表現性、題材性、指導と評価等の視点、および、人間性、社会性、相互理解等の視点から「現代社会における教育の意義」を探る。具体的には、心象表現領域と適応表現領域の比較を通じた実践研究をもとに、主として幼稚園造形表現・小学校図画工作科や中学校美術科の「適応表現領域」を材料に系統的な「目指すべき資質・能力」を追求する。また、戦後の学習指導要領改訂の変遷やそれに伴う指導内容・方法の変遷、情報機器活用の可能性の考察を通して、近隣諸国や欧米の実践事例との比較研究などを行う。	2	特任教授 渡部 憲生 (令和7年度担当)

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
美術科カリキュラム特論 演習	学習指導要領における重要事項、改訂事項を踏まえ、特に「主体的・対話的で深い学び」の観点から美術科のカリキュラムに視点を当て、学校や地域、子供たちの発達課題に即した表現題材開発を行う。具体的には、教科書や美術資料等を中心に、「何が出来るようになるか」に向けた「何を学ぶか」「どのように学ぶか」の視点で題材開発並びにカリキュラム開発を行う。主に「立体、工作」における発想・構想に関して、思い付いたアイデアを、用途や材料の特性を踏まえてどのように表すか組立てていく往還に着目し、育みたい資質・能力の観点からカリキュラムについて考察していく。その際、教育活動へのICT活用の実際についても考察を深めていく。	2	特任教授 渡部 憲生 (令和7年度担当)
美術科教育実践研究Ⅰ	学習指導要領の改訂内容や背景を踏まえ、美術科の授業改善の視点を明らかにするとともに、附属幼・小・中学校授業公開に参加し、授業実践とその授業案を対照させながら授業実践について学習する。附属幼・小・中学校および研究拠点校における造形・図画工作・美術（心象表現領域）の授業を参観して、教育現場の実践授業を通した授業分析や題材分析を行う。また、授業記録を元にした研究室でのディスカッションにより、実践的な指導と評価の在り方や教科授業および教科経営の在り方等を学ぶ。その上で、現代の幼児・児童・生徒を想定した魅力ある造形・図画工作科・美術科の表現分野および鑑賞に関する題材開発を行う。	2	
美術科教育実践研究Ⅱ	学習指導要領の改訂内容や背景を踏まえ、美術科の授業改善の視点を明らかにするとともに、附属幼・小・中学校授業公開に参加し、授業実践とその授業案を対照させながら授業実践について学習する。附属幼・小・中学校および研究拠点校における造形・図画工作・美術（適用表現領域）の授業を参観して、教育現場の実践授業を通した授業分析や題材分析を行う。また、授業記録をもとにした研究室でのディスカッションにより、実践的な指導と評価の在り方や教科授業および教科経営の在り方等を学ぶ。その上で、現代の幼児・児童・生徒を想定した魅力ある造形・図画工作科・美術科の表現分野および鑑賞に関する題材開発を行う。	2	

○人間発達心理コース（教育心理学領域・幼児教育領域）

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
教育心理学特論演習	教育現場において必須と思われる心理学的知識として、「学習能力の発達の基盤となる認知発達」・「発達における認知機能障害」・「学校における心理的問題」について学ぶ。それを踏まえて後半では、先行研究を調べ、独自の手法について模索する。特に、幼児・児童および生徒の心身の発達および学習の過程（障害のある幼児、児童および生徒の心身の発達および学習の過程を含む）の視点を重視する。	2	教授 住吉 チカ
認知教育方法特論	効果的な教授技術の開発・教材作成のために必要な心理学的知識を学ぶ。特に、知識形成、問題解決能力、および学習障害などのトピックスについて、認知心理学的視点を重視する。前半は認知心理学で教育に関連する代表的な文献を抄読する。後半では、各人が興味を持った研究について掘り下げ、自身の研究テーマとの関連を探索する。	2	
認知教育方法特論演習Ⅰ	知識形成、問題解決能力、および学習障害についての知識を、どのように効果的な教授技術の開発・教材作成に活かせるか考えるために、認知心理学、発達心理学の手法を学ぶ。それを踏まえて後半では、先行研究を調べ、独自の手法について模索する。基本的には各人の研究テーマ追究を支援するが、本演習では幼児・児童・青年期の認知機能・学習障害をテーマとすることが望まれる。	2	
認知教育方法特論演習Ⅱ	認知教育方法特論演習Ⅰで得た先行研究の知見や方法論をもとに、教授技術の開発・教材作成について具体的な実践案を立てる。そしてその効果について、実験や調査を実施する。また可能であれば、教育現場などで実践する。実験を実施する場合は、認知心理学的手法を用いることが望ましい。調査を行う場合は、多変量解析などの統計的知識を修得していることが望ましい。	2	
発達心理学特論	広い意味での発達心理学に関する理論と現象について理解を深め、広い視野に立ってヒトの生涯発達過程を捉えることができるようになることが本特論の到達目標である。発達理論（主として成人になるまでを範囲とすることが多い）および生涯発達理論（一生涯を範囲とする）について、また認知機能とパーソナリティ・社会機能の生涯発達に関する知見について幅広く概説する。これらの概説等に基づいて、講師と受講生とで討論を行う。	2	教授 木暮 照正
発達心理学特論演習Ⅰ	広い意味での発達心理学に関する理論について理解を深め、広い視野に立ってヒトの生涯発達過程を捉えることができるようになることが本演習の到達目標である。子ども期と大人期の発達過程の「繋ぎ目」となる青年期と新成人期、成人初期に注目し、この年齢期を含む生涯発達理論を中心に概説する。受講生は適宜関連文献を講読・発表し、これらを踏まえて、講師と受講生とで討論を行う。	2	

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
発達心理学特論演習Ⅱ	広い意味での発達心理学に関する現象について理解を深め、広い視野に立ってヒトの生涯発達過程を捉えることができるようになることが本演習の到達目標である。子ども期から青年期・成年期・高齢期までの認知機能の発達・加齢変容について概説する。受講生は適宜関連文献を講読・発表し、これらを踏まえて、講師と受講生とで討論を行う。	2	教授 木暮 照正
発達心理学特論演習Ⅲ	広い意味での発達心理学に関する現象について理解を深め、広い視野に立ってヒトの生涯発達過程を捉えることができるようになることが本演習の到達目標である。子ども期から青年期・成年期・高齢期までのパーソナリティ・社会機能の発達・加齢変容について概説する。受講生は適宜関連文献を講読・発表し、これらを踏まえて、講師と受講生とで討論を行う。	2	
乳幼児・小学生の心理学 特論	乳幼児期から学童期まで子どもは、心的内面を十分に言語化して表現することが難しい場合が多い。乳幼児および小学生の発達心理学における基礎的な知識について解説するとともに、言語表現が十分に期待できない対象の内面を探る方法について、著名な研究を複数取り上げながら紹介していく。後半に取り上げる具体的な研究事例やトピックスの選定にあたっては、受講者の修士論文のテーマと関連を意識して、最新の研究動向を紹介していく。	2	教授 高谷理恵子
乳幼児・小学生の心理学 特論演習Ⅰ	乳幼児期から学童期まで子どもは、心的内面を十分に言語化して表現することが難しい場合が多い。先行研究の講読を通して、このような言語表現が十分に期待できない対象の内面を探る研究方法についての理解を深める。また乳幼児期、および学童期における各発達段階についての理解を深める。具体的に講読する先行研究の選定にあたっては、受講者の修士論文のテーマと関連を意識する。	2	
乳幼児・小学生の心理学 特論演習Ⅱ	乳幼児期から学童期まで子どもは、心的内面を十分に言語化して表現することが難しい場合が多い。先行研究の講読を通して、このような言語表現が十分に期待できない対象の内面を探る研究方法についての理解を深める。また乳幼児期、および学童期における各発達段階について、それらの発達に影響を及ぼす可能性のある諸要因についての理解を深めていく。具体的に講読する先行研究の選定にあたっては、受講者の修士論文のテーマと関連を意識する。	2	
乳幼児・小学生の心理学 特論演習Ⅲ	乳幼児期から学童期まで子どもは、心的内面を十分に言語化して表現することが難しい場合が多い。先行研究の講読を通して、このような言語表現が十分に期待できない対象の内面を探る研究方法についての理解を深める。また乳幼児期、および学童期の健全な発達を促すために、保育や学校教育、地域でできることは何か、さらに家族の支援のあり方について考えていく。具体的に講読する先行研究の選定にあたっては、受講者の修士論文のテーマと関連を意識する。	2	
中学生・高校生の心理学 特論	中学生・高校生の間の発達の变化に関連した内容を取り扱う。主なトピックとしては以下のものがある。(1)幼児期・児童期との比較に基づく青年期の心身の変化とそれがもたらす心理的影響(2)幼児期・児童期との比較に基づく青年期の認知的変化と人間関係の変化(3)アイデンティティ形成に関連する諸領域の課題。これらのテーマについて、文献講読および議論を行う。文献の選定には受講者の興味関心や研究テーマに併せて調整を行う。	2	准教授 伊藤 雅隆
人間理解特論演習Ⅰ	生徒指導、教育相談および進路指導等に関する視点を踏まえて、心理療法を支える様々な人間観と治療方法から、「人間を理解する」ことについて深く考えること、また、人間理解に取り組む中で必要とされるカウンセリングマインドを理解し、日常のコミュニケーションのメカニズムを問うこと、自分自身についての理解を深めることを目標とする。文献講読および議論を行い、必要に応じてロールプレイを実施する。文献の選定は受講者の興味関心や、研究テーマにあわせて調整を行う。	2	
人間理解特論演習Ⅱ	生徒指導、教育相談および進路指導等に関する視点を踏まえて、心理療法を支える様々な人間観と治療方法から、「人間を理解する」ことについて深く考えること、また、人間理解に取り組む中で必要とされるカウンセリングマインドを理解し、日常のコミュニケーションのメカニズムを問うこと、自分自身についての理解を深めることを目標とする。文献講読および議論を行い、必要に応じてロールプレイを実施する。文献の選定は受講者の興味関心や、研究テーマにあわせて調整を行う。	2	
人間理解特論演習Ⅲ	生徒指導、教育相談および進路指導等に関する視点を踏まえて、心理療法を支える様々な人間観と治療方法から、「人間を理解する」ことについて深く考えること、また、人間理解に取り組む中で必要とされるカウンセリングマインドを理解し、日常のコミュニケーションのメカニズムを問うこと、自分自身についての理解を深めることを目標とする。文献講読および議論を行い、必要に応じてロールプレイを実施する。文献の選定は受講者の興味関心や、研究テーマにあわせて調整を行う。	2	
実験心理学特論	実験心理学は、実験（場合によっては調査）手法を用いることで科学的にヒトや動物の心理現象を解明することを目指す心理学の基礎領域である。これには学習心理学、認知心理学、比較心理学、生理心理学、感覚・知覚心理学、発達や社会心理学のほか、神経科学分野の研究まで広く含まれる。この授業では、心理学における方法論という問題に焦点をあて、心理学の諸領域の研究が実験的手法によりどのように科学的に展開されるのかについて、海外の研究論文の講読を通して考える。	2	教授 筒井 雄二

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
実験心理学特論演習Ⅰ	実験心理学は、実験（場合によっては調査）手法を用いることで科学的にヒトや動物の心理現象を解明することを目指す心理学の基礎領域である。これには学習心理学、認知心理学、比較心理学、生理心理学、感覚・知覚心理学、発達や社会心理学のほか、神経科学分野の研究まで広く含まれる。この授業では、実験心理学の各論として、学習心理学に焦点をあて、学習心理学に関連した海外の研究論文を講読し、過去の研究から新しいトピックまで幅広く理解を深めていくことを目指す。	2	教授 筒井 雄二
実験心理学特論演習Ⅱ	実験心理学は、実験（場合によっては調査）手法を用いることで科学的にヒトや動物の心理現象を解明することを目指す心理学の基礎領域である。これには学習心理学、認知心理学、比較心理学、生理心理学、感覚・知覚心理学、発達や社会心理学のほか、神経科学分野の研究まで広く含まれる。この授業では、実験心理学の各論として、認知心理学に焦点をあて、認知心理学に関連した海外の研究論文を講読し、過去の研究から新しいトピックまで幅広く理解を深めていくことを目指す。	2	
実験心理学特論演習Ⅲ	実験心理学は、実験（場合によっては調査）手法を用いることで科学的にヒトや動物の心理現象を解明することを目指す心理学の基礎領域である。これには学習心理学、認知心理学、比較心理学、生理心理学、感覚・知覚心理学、発達や社会心理学のほか、神経科学分野の研究まで広く含まれる。この授業では、実験心理学の各論として、情緒・動機づけ心理学、生理心理学や神経科学研究に焦点をあて、それらに関連した海外の研究論文を講読し、過去の研究から新しいトピックまで幅広く理解を深めていくことを目指す。	2	
幼児心理学特論	幼児の姿をみていると、一見意味のないような行動にも意味がある。これを見ることができないうと、子どもは未熟で、早く大人と同じような行動を身につけさせなければならないという考えになってしまう。本授業では、幼児期の行動を特に、イメージの発達に焦点をあてながら、幼児の行動や保育におけるイメージの役割について考察する。また、発達に影響を及ぼす要因を出生体重や養育・保育環境という点から考えていきたい。	2	教授 原野 明子
幼児心理学特論演習Ⅰ	幼児の行動の意味を各年齢で出会うであろう経験をもとに考え、幼児期の発達と保育者や親の役割について考える。特に幼児心理学特論演習Ⅰでは乳幼児期の子どもの養育や保育に関わる問題を通して、保育者や親の役割、支援について先行研究をもとに検討をすすめる。中でも、東日本大震災やコロナ禍での保育の実態や今後何が生かせるかを検討した研究に焦点をあてて、幼児期に必要な子どもの経験は何かを考えたい。	2	
幼児心理学特論演習Ⅱ	「子どもの養育に心理学が使えること」やその他の幼児の発達と心理学関係の論文を読み、保育現場や小中学校の教育現場にこれらの研究がどう資するのか、また、これらの研究にどのような意味があるのかをディスカッションする。その上で保育者や教員が心理学的知見をもつことが保育・教育や子ども理解にどのような影響を与えるかについても考えることができるようにしたい。研究のための研究ではない研究とは何かを考えたい。	2	
幼児心理学特論演習Ⅲ	消極性や引っ込み思案的な特性をもつ子どもの実態やその発達について、出生時の体重といった出生時および身体的な要因、子どもの認知的側面、保育者の子どもへの対応や認識の仕方等保育側の要因を検討しながら、発達心理学の研究をすすめる視点や研究のすすめ方について考えていく。幼児を対象とした研究の方法にはどのようなものがあるかについても探っていく。結果および考察のまとめ方を先行研究にもとづき議論していきたい。	2	
幼児教育学特論	『幼稚園教育要領』や『保育所保育指針』で、遊びを通した総合的な指導（保育）が基本となる考え方として示されていることから分かるように、保育・幼児教育の実践で遊びは大きな比重を占めている。しかし、遊びを論じる切り口・理論は様々ではない。本授業では、極力毛色の異なる遊び論を講読し、各論者の異同を議論する。それにより、遊び論の広がり、それぞれの保育・幼児教育実践とのつながりを検討する。	2	
幼児教育学特論演習Ⅰ	本授業は、インタビューなど小規模な言語データの質的分析に適した方法である Steps for Coding and Theorization (SCAT; 大谷2011など) の習得を目指すものである。幼児教育学に関するテーマ（例：中堅保育者の専門性発達）を設定した上で、保育者あるいはテーマにふさわしい研究協力者へのインタビューの実施・そのデータの分析という一連の研究プロセスを経験する。	2	准教授 保木井啓史
幼児教育学特論演習Ⅱ	幼児教育学特論演習Ⅰでのインタビューデータの質的な分析を踏まえ、その分析結果や結果と考察の記述を行う。それらを通して、第1に、コーディング、概念化、再文脈化といった、質的研究の考え方への理解を深める。第2に、分析結果を、参与観察や文書の資料といった他の種類のデータと統合（トライアングレーション）したり、文章や図表で提示したりする方法を学習する。	2	
幼児教育学特論演習Ⅲ	参与観察によるデータ収集は、幼稚園・保育所といった保育施設に関わる人々のリアルな生活世界をすくいとり研究の俎上に乗せるための重要な方法である。本授業では、参与観察および、参与観察を主要なデータ収集の方法とするエスノグラフィーの方法、考え方、観察調査やエスノグラフィーによってなし得ることが何かを文献を元に理論的に学習する。	2	

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
幼児教育内容特論	我が国の幼児教育の制度やカリキュラムの歴史の変遷をたどりながら「保育とは何か」「幼児期とは」等の幼児教育の本質について考える。また、具体的な実践例をもとに幼児教育の内容と方法について子どもの発達や子どもの権利条約の視点から考える。現代の子どもの発達上の問題点を検討し、現代的視点から幼児教育における教育内容のあるべき姿を議論し、深める。	2	特任教授 村木 洋子 (令和7年度担当)
幼児教育内容特論演習Ⅰ	さまざまな幼児教育実践にふれ、子ども・保育者・保護者の関係性を学ぶ。幼児教育現場の課題を明らかにするとともに、幼児の豊かな育ちを保障する幼児教育の内容と方法について論議する。授業者の保育現場体験、保育実践記録を素材とし、保育内容を構造的にとらえていく。保育における人間関係発達論（嶋さな江）、親が参画する保育をつくる（池本美香）、発達する保育園大人編（平松知子）を参考テキストとする。	2	
幼児教育内容特論演習Ⅱ	東日本大震災による原発事故後の福島保育について、「それでも、さくらは咲く（さくら保育園編）」を中心とする関連実践記録や保育白書、関係書籍から振り返る。また、コロナ禍における保育の状況を探るなかで、子どもの育ちを保障する保育とは何かについて具体的に考える。想定外の困難が起こった時、保育に求められるものについて論議する。	2	
幼児教育内容特論演習Ⅲ	子どもおよび幼児教育内容について、テキスト「保育的発達論の始まり」をもとに子どもの「主体性」とは何か、子どもの「主体性」はどう育つのか、「子ども観」「発達観」の変遷、発達をみる目をひろげ、「保育」と「発達」を結びなおすという筆者の意図を読み解き、本質的なとらえ方を議論して深めていく。また、豊富な参考文献にもふれながら幼児教育を考える上での基本的知識を学ぶ。	2	
幼稚園実践研究	幼稚園、保育園や子育て支援センターなどを観察し、子ども理解とそれに基づく保育の方法・内容についての理解を深める。幼稚園における教育を理解するとともに、幼稚園以外の多様な子どもや保護者をとりまく施設の役割や保育者の職務についての理解を深める。観察をした園や施設に関する設置基準等の関係法令や設置の歴史・経緯については事前の学習を必要とし、観察後にはレポートをまとめ、受講生の観察の視点を可視化する。	2	村木 洋子 保木井啓史 原野 明子

○人間発達心理コース（臨床心理領域）

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
教育分野に関する理論と支援の展開 (学校臨床心理特論)	学校と社会、学校と家庭、子どもの発達とその障害、学校の組織と体制等の理解について学際的な視点から学び、学校におけるスクールカウンセリングの在り方や基本的な方法を検討する。さらに、子どもの問題行動に対して、アセスメントの方法、支援方針、援助の実際について、個別援助計画の重要性を認識する。特に、子どもの問題行動として現れる心理を理解する。	2	未定
臨床心理学特論Ⅰ	メンタライゼーションに基づく治療（Mentalization-based treatment : MBT）をベースに、虐待などの心や脳にダメージを与えるような養育体験と影響についての支援の理解を深める。また、心理療法を始めるにあたってアセスメントに必要な知識を身に付ける。	2	准教授 岸 竜馬
臨床発達心理学特論	乳幼児期から老年期までの生涯発達において課題となりやすい事柄を取り上げて、発達支援にあたり必要とされる知識を身に付ける。また、発達支援における実際の支援方策についての理解を深める。	2	特任准教授 鈴木 清 (令和7年度担当)
福祉分野に関する理論と支援の展開 (福祉心理特論)	福祉現場で生じる問題と背景について理解し、現場における心理社会的課題とその支援方法の知識を得る。社会的福祉の基本理念および社会福祉制度や行政制度と現状と課題を理解するとともに、現場で生じている問題とその背景、社会的制度と専門職の役割、臨床心理学的援助の具体的課題や実践の技法についての基礎的知識を習得する。児童福祉、障害者福祉、高齢者福祉の現場における心理社会的課題と必要な支援方策を理解し習得する。	2	特任教授 市川 英雄 (令和7年度担当)
幼児発達心理学特論	子どもたちの様々な問題に対し、幼児期の体験の重要性について言及されることが多い。本授業では、幼児の認知・思考の発達、自己意識の発達、社会性の発達、言語の発達等幼児期の発達の様子をたどりながら、発達の原理、発達課題に言及しつつ幼児期に必要な体験とは何か、また、それらを支える親や保育者など大人の役割、あるいは子どもの育ちを見る眼とはどのようなものであればよいかについて考えていきたい。	2	教授 原野 明子
臨床心理学特論Ⅱ	臨床心理学における研究の在り方について身につけることを目標とする。講義や、発表ディスカッションを通して、臨床心理学研究の意味や意義についてガイドラインに沿って学習する。	2	准教授 伊藤 雅隆
保健医療分野に関する理論と支援の展開 (神経生理学特論)	学校保健、特に精神保健の基礎となる神経科学、脳科学の進歩は著しい。「心」は脳の活動自体であること、脳の中で何が進行しているか、具体的な過程について最新の知見を学ぶことを目的としている。脳の部位の機能やその障害について、心理臨床との関わりの中で考察し、心理専門職ができる支援について、ともに考えていくことを目標とする。	2	(非)横山 浩之

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
保健医療分野に関する理論と支援の展開 (精神医学特論)	心理専門職にとって必要な精神医学の基本について学ぶ。様々な精神疾患（統合失調症・躁うつ病・不安障害・強迫性障害・摂食障害・トラウマ関連障害・認知症）についてその症状の特徴について理解を深める。さらに、病態の理解、患者との向き合い方、支援の在り方など、心理専門職ができる支援について、ともに考えていくことを目標とする。	2	(非)熊切 力
保健医療分野に関する理論と支援の展開 (精神病理学特論)	心理臨床の現場で遭遇する精神障害の原因、分類、症状の現れ方など総論的な概観を行ったあと、いくつかの重要な精神障害を取り上げ、おのおのについて概念、頻度、症状、診断、治療、予後などの知識を深め、さらに精神障害に対する施策についても学習する。また、保健医療分野における心理支援職と他の専門職との協働関係についても理解を深める。	2	教授 片山 規央
障害児心理学特論	障害のある子どもたちの発達特性、障害をどのようにとらえるか、障害観、制度の変遷について概観しながら検討し、児童福祉臨床における各障害の理解と支援の実践について学ぶ。本年度は、原口淑子の『「障害者・障害児心理学」アセスメントと心理支援の実践』を読み進め、障害児支援の際に必要な基本的要素を習得していく。	2	特任准教授 鈴木 清 (令和7年度担当)
障害児病理特論	学習障害、注意欠陥多動性障害、広汎性障害について、その注意・記憶・認知機能等の特性から、より効果的な教育プログラム（早期療育プログラム）について基本を修得する。さらに、被虐待やDV家庭で育った子どもたち等の心的外傷をアセスメントし、自殺・いじめ・ひきこもり等への対応も含めそのケア・治療法の基本を学ぶ。	2	未定
臨床心理面接特論Ⅰ (心理支援に関する理論と実践)	臨床心理的処遇の枠組み、初回面接、アセスメント、ケースレポートの書き方、各種心理療法について講義する。また主に教育臨床に関わる臨床心理的支援のありかたについて自験例を提示しながら論じる。具体的には、相談室における児童生徒の相談の実践、スクールカウンセラーの仕事、学校教員とカウンセラーのコンサルテーションとコラボレーションなどについてふれる。	2	教授 青木 真理
臨床心理面接特論Ⅱ	教育相談など学校臨床に不可欠な知見であるシステム論に基づいた家族療法を中心に講じる。家族療法の歴史的展開を概観し、その諸学派の特徴的な技法を学ぶ。システム論に基づく家族療法を基本にして、近年注目を浴びているブリーフセラピー、ナラティブセラピー、解決志向アプローチについても詳述したい。異なるアプローチに基づく家族療法の実践をビデオ教材などを活用して学び、家族療法の理論と技法を修得することを目的としている。	2	特任教授 生島 浩 (令和7年度担当)
心理支援に関する理論と実践 (心理学研究法特論)	心理臨床、学校臨床の中で行う、心理学的な研究方法について、特に質的なデータ分析および量的なデータ分析について、各教員の専門的立場から講じ、実際のデータ分析を行う。また、心理学における基礎的な研究法を踏まえた上で、実際の心理臨床場面における事例や事象を想定し、研究計画を立て、統計処理などのデータ分析の理論と技術を習得することを目的とする。	2	岸 竜馬 生島 浩 青木 真理
心理実験統計法特論	本講義では、各人の研究を進めるために必要な統計的知識について、基礎から応用にいたるまで明確な知識を得ることを目的とする。また、心理学・教育学において、実験や調査を行うのに必要なデータ処理・統計について基礎的な知識を身につける。さらに、多変量解析など特殊な目的に応じた統計分析手法についても知識を得る。	2	教授 住吉 チカ
学習心理学特論	本演習では、学習場面で心理学的知識を有効に活用する方法について知識を得る。主に「学習能力の発達の基盤となる認知発達」・「発達における認知機能障害」・「学校における心理的問題」を分けて学ぶ。さらに後半では、先行研究を調べ、独自の手法について模索する。基本的には各人の研究テーマ追究を支援するが、本演習では幼児・児童・青年期の認知機能・学習障害をテーマとすることが望まれる。	2	
家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践 (家族臨床心理学特論)	家族支援の理論と実践について学ぶ。家族イメージ、構造、機能、コミュニケーション発達を概観、検討しながら、児童福祉臨床における支援技法、心理教育、家族支援プログラムの実践についてふれていく。本年度は、秋山邦久の「臨床家族心理学」を読み進め、家族支援の際に必要な基本的要素を習得していく。	2	特任准教授 鈴木 清 (令和7年度担当)
心理支援に関する理論と実践 (精神分析学特論)	精神分析的な心理療法の治療に必要なこと、面接室の創り方、その面接空間で進められていくこと（見立て、治療契約）、体験し理解していくこと（聴くこと、伝えること、知ること、転移と逆転移など）を学ぶ。本年度は、松木邦裕の『私説対象関係論的心理療法入門』、藤山直樹の『精神分析という営み』を読み進め、心理面接の際に必要な基本的要素について、精神分析的な見解や技法を通して学ぶ。	2	准教授 岸 竜馬
投影法特論	人格のアセスメントとしての投影法の解釈を目指す。ここでは包括システムによるロールシャッハ・テストの施行や解釈を習得し、投影法からの心理的理解を学習する。特に、自己統制・ストレス耐性、情報処理、認知的媒介、思考、感情、自己知覚、対人知覚という側面から、パーソナリティを把握し、心理支援方法の同定ができるようにすることをねらいとする。	2	准教授 岸 竜馬

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開 (犯罪・非行臨床特論)	非行少年・犯罪者の社会復帰過程を援助する心理臨床的諸活動である「非行・犯罪臨床」を講じる。非行少年・犯罪者の定義、非行・犯罪臨床機関の概要など処遇の流れを概観し、個人面接・家族面接・グループアプローチなどにより、非行少年、犯罪者・その家族・被害者（遺族）・コミュニティに対する援助実践について論じる。講義では、保護観察官としての臨床経験の他、各専門機関に勤める職員の臨床論文をもとに非行・犯罪臨床の実際を学ぶ。	2	生島 浩 (非)半澤 利一
教育分野に関する理論と支援の展開 (教育臨床学特論)	学校とその周辺における臨床心理学的援助について、講義とロールプレイングを通じて学ぶ。ロールプレイングは、ある学校を想定し、そこにおいてスクールカウンセラーと教員が協働しながら教育臨床的課題の解決にあたるストーリーを演じる。それを録画・録音し、逐語録に起こし、それらの資料をもとにふりかえりを行う。自身のカウンセリングの態度について検討し、講義で取り上げる問題について一定の知識と理解を得、対応を学ぶ。	2	教授 青木 真理
心理的アセスメントに関する理論と実践 (心理アセスメント特論)	発達検査、知能検査の意義を理解し、適切に実施・スコアリング・解釈を行い、教育・支援に役立つレポートの作成と本人、家族、関係者に対して役立つフィードバックのやり方を学ぶ。K-A-B-C心理教育アセスメントバッテリーの理論と実際、検査結果の特別支援教育への活用、新版K式発達検査の理論と実際、乳幼児の発達の見方と療育への活用、田中ビネーV知能検査の理論と実際、障害者手帳、年金等、障害者福祉での活用を理解する。授業では講義、小グループでの実技を行う。	2	鈴木 清 青木 真理
福祉分野に関する理論と支援の展開 (家族福祉臨床特論)	近年増え続けている児童虐待やDVなどの家族間暴力、障害児・者を抱える家族や家族間介護の問題など、福祉領域における家族問題に対する支援の実際について学ぶ。現在の福祉制度や福祉機関の機能について把握し、それらの活用について具体的事例を通して理解を深めた上で、制度活用だけでは解決が難しい様々な家族間の課題に対して、臨床心理学的支援での評価・介入・支援方法などを学修する。	2	特任教授 市川 英雄 (令和7年度担当)
臨床心理地域援助特論	地域社会や集団組織に働きかける心理的援助の理論と方法を習得する。具体的には危機介入、コンサルテーション、ケースマネジメント、社会生活技能訓練、家族心理教育、地域精神保健などの基礎的知識と技能並びに、臨床心理学的援助の役割と課題、各場面での具体的課題や実践的技法についての知識を習得する。このために専門相談機関を訪問し施設見学と専門職員から講義を受ける。	2	
家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践 (グループ・アプローチ特論)	グループ・アプローチは、家庭や学校、職場などの人間関係をよくし、人々のメンタルヘルスに貢献するものとしてその広がりを見せている。授業では、「グループ・アプローチの理解と実践」をテーマに、グループ・アプローチの理解を深めるとともに、実践力を養うことを到達目標とする。特に、グループ・ダイナミクスについて学び、グループ・アプローチの1つとしてサイコドラマを学習する。	2	未定
心理支援に関する理論と実践 (心理療法特論)	児童養護施設における被虐待児の心理的理解、外傷体験をもつ被虐待児への心理療法の理論と実践、専門職種の協働、コンサルテーションの重要性等を身につける。また、児童養護施設で起こる様々な問題と課題に対して、どのように心理療法を行っていくかについて学び、日常生活場面と心理臨床場面での心理的関わりを活用できるようにすることをねらいとする。	2	(非)渡部 純夫
産業・労働分野に関する理論と支援の展開 (産業・労働心理学特論)	人々の職業生活に関わる諸問題について産業・組織心理学を軸に、キャリア発達や安全衛生などを視野に入れながら研究と実践の立場からアプローチする。職業生活に関わる心理学について体系的に把握した上で、職場における諸問題について先行研究や各種調査などに基いて課題分析を行う。併せて諸課題への対応や支援の在り方について学び検討する。	2	(非)五十嵐 敦
心の健康教育に関する理論と実践 (心の健康教育特論)	心の健康教育とは、心の健康を維持するための知識を提供し、そのための力を育てることである。心理学に基づく知識や方法を提供する、「予防開発的な心理教育」が、心の健康教育の中核となる。ここでは、自殺予防やひきこもり支援、うつ病や発達・健康上の問題への対応の援助、また、緩和ケアやストレス対処、職場でのメンタルヘルスなどの心の健康の保持増進する教育的援助を学ぶ。	2	岸 竜馬 片山 規央 (非)渡邊 宏周 (非)川島 慶子
臨床心理査定演習Ⅰ (心理的アセスメントに関する理論と実践)	臨床心理学的支援の場で用いられることの多い心理アセスメントについて、テスター・テスト体験を通じて体験的に学ぶ。取り上げる技法は、YG法などの質問紙法、バウムテストなどの描画法、ロールシャッハ法などの投影法などのほか、箱庭療法などの表現療法についても学ぶ。一つの技法を学ぶごとに受講者はレポートを作成する。レポート作成を通じてアセスメント所見の書き方と、被検者へのフィードバックの仕方を学ぶ。	2	教授 青木 真理
臨床心理査定演習Ⅱ	発達検査・知能検査の意義を理解し、適切に実施・解釈を行い、検査結果を心理・教育的アプローチに活用できるための理解と技法を学ぶ。授業ではWISC-IVを中心に引き上げ、発達検査・知能検査の基本的な考え方、知能と精神機能、WISC-IVの理論と実施方法、検査結果の生かし方、検査報告書の書き方などを実践的に習得させる。授業は、講義以外は、小グループに分かれて演習、実習形式で進める。	2	特任准教授 鈴木 清 (令和7年度担当)

授業科目名	授業科目の内容	単位数	担当教員名
臨床心理基礎実習	生徒指導・教育相談など学校臨床、心理臨床の専門職として面接を行うための基礎的技術の修得を目指す。ロールプレイによりカウンセラーおよびクライアント双方を経験し、自己理解・他者理解を深め、臨床心理面接の基礎を徹底した体験学習により学ぶ。また、「教育臨床研修講座」での事例研究に参加して生徒指導・教育相談などの実際に触れる。また、病院、福祉臨床等の関係領域のアプローチを学んで、関連する専門機関と連携する視野を養うことも大きな目的である。	2	岸 竜馬 青木 真理
臨床心理実習Ⅱ	公認心理師や臨床心理士になるための技術とセンスを身につけるための実習で、学内実習（相談室活動）と学外実習から成る。教員からスーパービジョンを受けながら心理臨床を体験する。実習を通して、自身の関わり方や言動を振り返り、課題を整理しながら、被支援者やクライアントの心理状態の理解を深める。その上で、次の関わり方や活動の計画を立て、実施できるようになることを目的とする。	2	青木 真理 岸 竜馬 生島 浩 鈴木 清
学校教育臨床研究ⅠA	6月と9月に集中講義の形態で行う。全院生が参加。各院生が学校教育臨床に関するテーマに沿って研究の意図と計画、中間段階での結果などについて報告し、集団討論、複数の教員の指導を受ける。なおこの授業は「学校教育臨床研究ⅡA」と隔年で開講する。こうすることによって、院生は2年かけてⅠとⅡの両方を履修でき、研究テーマを深化させることが期待される。	2	青木 真理 岸 竜馬 生島 浩 鈴木 清
学校教育臨床研究ⅡA	6月と9月に集中講義の形態で行う。全院生が参加。各院生が学校教育臨床に関するテーマに沿って研究の意図と計画、中間段階での結果などについて報告し、集団討論、複数の教員の指導を受ける。なおこの授業は「学校教育臨床研究ⅠA」と隔年で開講する。こうすることによって、院生は2年かけてⅠとⅡの両方を履修でき、研究テーマを深化させることが期待される。	2	生島 浩 鈴木 清 市川 英雄
臨床心理実習Ⅰ (心理実践実習)	公認心理師になるために欠かせない技術と理解を身につける。学内実習（相談室実習）と学外実習（医療、保健福祉、司法、教育など）から成り、大学教員と実習先指導者の両者から指導を受けながら、実習を行う。実習を通して、アセスメントと介入を行い、教員と実習指導者から指導を受けることを繰り返し、ケース・フォーミュレーションが行えるようになることを目的とする。	2	青木 真理 岸 竜馬 生島 浩 市川 英雄 (非)岡田乃利子 (非)大竹 愛 (非)松本 貴智 (非)遠藤 佳子
心理実践実習 (カウンセリング実習Ⅰ)	隔週通年の授業であり、大学院1年生と2年生の両方が参加する。「臨床心理・教育相談室」のインターク報告、心理面接のケース報告、グループワークの活動などについて院生が報告し議論する。2年生の臨床活動から1年生が学ぶことが、臨床活動の一翼を担うための準備ともなる。なお、「心理実践実習（カウンセリング実習Ⅱ）」と隔年で開講する。こうすることによって、院生は2年かけてⅠとⅡの両方を履修し、上述の授業の到達目標とテーマを深化させることが期待される。	2	青木 真理 岸 竜馬 生島 浩 市川 英雄
心理実践実習 (カウンセリング実習Ⅱ)	隔週通年の授業であり、大学院1年生と2年生の両方が参加する。「臨床心理・教育相談室」のインターク報告、心理面接のケース報告、グループワークの活動などについて院生が報告し議論する。2年生の臨床活動から1年生が学ぶことが、臨床活動の一翼を担うための準備ともなる。なお、「心理実践実習（カウンセリング実習Ⅰ）」と隔年で開講する。こうすることによって、院生は2年かけてⅠとⅡの両方を履修し、上述の授業の到達目標とテーマを深化させることが期待される。	2	生島 浩 市川 英雄
人間発達心理特別演習Ⅰ	修士論文研究のテーマを深め、研究を推進する。受講生はテーマを策定し、文献研究を行いながら調査計画を立案する。担当教員はそれに対して指導を行う。テーマは院生のニーズと関心を軸に決められる。	2	青木 真理 岸 竜馬
人間発達心理特別演習Ⅱ	前期の人間発達心理特別演習Ⅰを受けて、その研究をさらに発展深化させる。修士論文研究のテーマを深め、研究を推進する。受講生はテーマを策定し、文献研究を行いながら調査計画を立案する。担当教員はそれに対して指導を行う。テーマは院生のニーズと関心を軸に決められる。	2	生島 浩 鈴木 清 市川 英雄

5. 取得資格等

(1) 教員免許状

本専攻において取得できる教員免許状は、以下の通りです。ただし、既に当該学校種・教科の1種免許状を所持している者に限られ、教育職員免許法に定める所要の単位を修得することによって取得することができます。

- ①幼稚園教諭専修免許状
- ②小学校教諭専修免許状
- ③中学校・高等学校教諭専修免許状（国語、英語、音楽、保健体育、美術、家庭）
- ④中学校教諭専修免許状（社会）
- ⑤高等学校教諭専修免許状（地理歴史、公民）

※ 専修免許状を取得するには、本専攻の修了要件単位に含まれる科目のほかに、教職関連科目の履修が必要となります。

(2) 受験資格

人間発達心理コース臨床心理領域において取得できる受験資格は、以下の通りです。資格に必要な単位を修得後、資格審査を受験することができます。

①臨床心理士受験資格

（公財）日本臨床心理士資格認定協会認定の心理専門職（民間資格）であり、本専攻の修了要件単位に含まれる科目のほかに、資格取得に必要な科目の履修が必要となります。

②公認心理師受験資格

文部科学省・厚生労働省所管の心理専門職（国家資格）であり、本専攻の修了要件単位に含まれる科目のほかに、資格取得に必要な科目の履修が必要となります。

※ 公認心理師受験資格取得を希望する者は、4年制大学で公認心理師取得のために定められた単位を修得していることが必要であり、その上で、大学院で定められた単位を修得する必要があります。

6. 授業担当教員の研究概要

※ 担当教員および研究概要の一部を変更することがあります。

○言語文化コース

教員名	研究概要
教授 佐藤 佐敏	国語科教育における理論と実践の架橋を試みる研究。
教授 井實 充史	古代和歌および古代日本漢詩の研究。特に中国古典文学との比較を通じて、東アジア文学としての普遍性と日本文学としての独自性を追求している。
教授 半沢 康	日本の方言研究を行っている。特に東北地方の方言を対象とし、方言の伝播・変容、人々の方言意識などの問題を社会言語学的観点から考察する。
教授 澁澤 尚	中国古代の文学・思想・神話（漢文学）、漢字文化などの研究。
准教授 高橋 由貴	日本近代文学および比較文学の研究。
教授 佐久間康之 （令和9年3月退職予定）	外国語としての英語（EFL）における文字言語および音声言語の理解プロセスに関して認知心理学の記憶モデルの視点から基礎的研究を行い、理論と実践の統合を目指す。研究の対象は小学生から成人までと幅広く設定している。
教授 久我 和巳	社会と文化、社会と言語の関連の研究。メディア現象や文化産業の分析を通して、現代社会のありようを考察する。
教授 朝賀 俊彦	英語を中心とした統語と意味のインターフェイス研究。
教授 川田 潤	初期近代英文学およびユートピア文学を学際的な関心から分析する。
教授 高田 英和	近現代イギリス文学・文化研究。

教員名	研究概要
准教授 高木 修一	英語学習者の読解プロセスに関する研究を中心に、言語テストや評価についても研究を行っている。
准教授 佐藤 元樹	生成文法理論に基づく英語の構文と言語現象の分析。
教授 真歩仁しょうん	英語教育におけるより良いティームティーチング（TT）を目指し、小・中学校のTTにおける教師・ALTの役割、関心および教育に関する信念や位置づけについて、アンケートやインタビューによる調査を行っている。

○地域文化コース

教員名	研究概要
教授 牧田 実 (令和 9 年 3 月退職予定)	地域社会の今日的な変容と再編の動向を踏まえつつ、これに対する住民の主体的都市形成の営為をまちづくりとして捉え、その構造と過程を社会的に解明する。
教授 小野原雅夫 (令和 9 年 3 月退職予定)	カントを中心とした西洋倫理思想の研究。平和論、バイオエシックス、環境倫理学、教育倫理学等、現代応用倫理学の諸課題の研究。高等教育に関する研究。
教授 初澤 敏生 (令和 9 年 3 月退職予定)	繊維産業・陶磁器業などの地場産業を中心に、地域経済構造の解明に関する研究を進めている。また、地域社会構造面からの地域文化の把握、地理教育を中心とする教育研究にも取り組んでいる。
教授 中村 洋介	自然災害科学、防災教育。東日本大震災後の地震発生予測なども扱う。
教授 小松 賢司	日本近世村落史、地域社会史。
准教授 鍵和田 賢	ヨーロッパ史、および宗教的寛容についての歴史的研究。
教授 千葉 桂子 (令和 9 年 3 月退職予定)	被服の適合性に関して、被服設計の立場から着用性能について検討する。また衣服と人間の関わりについても、時代の背景や気候風土と関連させて考察する。
教授 中村 恵子	調理・加工過程における食品の変化やおいしさの知覚について科学的に研究する。食に関する教育について調査・分析・考察する。
教授 角間 陽子	生涯を見通した主体的な生活者を育成する家庭科教育の研究。生活の自立と共同・共生の理論に基づく生活経営分野（家族、消費生活を含む）の学習内容や教材、評価についての研究。

○スポーツ・芸術文化コース

教員名	研究概要
教授 小川 宏	体育・スポーツにおける哲学的な諸課題についての研究、およびバレーボール競技に関する多角的な研究を行っている。
教授 安田 俊広	身体活動にともなう生体の変化と適応について、主に骨格筋を中心に研究している。
特任教授 竹田 隆一 (令和 7 年度担当)	近世武道伝書のスポーツ運動学的視点からの分析的研究、および剣道の初心者に対する指導法についての研究を行っている。
准教授 杉浦 弘一	スポーツ医科学、特に競技選手のコンディショニング、および疲労と疲労回復について研究を行っている。
准教授 蓮沼 哲哉	生涯スポーツの在り方やスポーツ政策についての研究、およびスポーツによる地域活性化について実践研究を行っている。
准教授 本嶋 良恵	様々な競技種目の動作についてバイオメカニクスの視点から競技力向上と関連づけて研究を行っている。

教員名	研究概要
准教授 松本 健太	体育科・保健体育科の授業を研究対象にしながら、学習指導論ならびに授業づくりについて研究を行っている。
教授 横島 浩 (令和9年3月退職予定)	主に作曲・指揮、作品分析の領域での研究だが、音楽創造に関わる事柄（管弦楽法、演奏史、音楽史等）についても研究を進める。
教授 中畑 淳 (令和9年3月退職予定)	バロックから近現代に至るピアノ作品の作品解釈ならびに演奏法の研究。また、声楽領域におけるピアノ伴奏法および器楽領域（管弦打楽器）における作品解釈、室内楽を中心としたアンサンブル研究を行っている。
教授 今尾 滋	オペラを中心とした声楽の発声法並びに演奏法の研究。また、R・ヴァーグナーの作品の主要な担い手である「ヘルデンテノール」について研究している。関連研究として、キャリアを積んだ歌手の声種転換の問題についても研究中である。
教授 杉田 政夫	音楽教育の歴史と哲学、音楽科カリキュラム論、授業研究、ポピュラー音楽の教材化などを扱っている。北欧の音楽教育や、ノルウェーのコミュニティ音楽療法についても研究を進めている。
教授 渡邊 晃一	絵画、版表現、現代美術（インスタレーション等）の制作や、芸術企画のプロジェクト研究。論文では主に身体、生命形態、STEAM教育を主題とし、美術における「制作学」の理論的構築をめざしている。
特任教授 渡部 憲生 (令和7年度担当)	美術教育理論と実践を多角的に分析し、学校教育における造形活動の意義について考察するとともに児童生徒理解にもとづく教材開発並びにカリキュラムと授業構造の研究。
准教授 加藤奈保子	美術理論および美術史。特に17世紀イタリアの絵画・彫刻に関する研究。

○人間発達心理コース（教育心理学領域）

教員名	研究概要
教授 筒井 雄二	学習心理学，記憶，情緒・動機づけ心理学を専門領域とし，動物やヒトの学習・記憶の心理学的メカニズムに関する研究を行う。また，近年では基礎研究の手法を用い原子力災害の精神影響に関する研究に従事し，災害心理学に関する研究を展開している。
教授 住吉 チカ	言語・認知機能の障害について，その評価法および障害からの回復・支援について研究を行っている。
教授 高谷理恵子	乳幼児の行動観察，および実験的アプローチによる研究。医療や教育の場での発達支援に関する研究を行っている。
教授 木暮 照正	研究領域は教育心理学，認知心理学，メディア心理学。現在は心理学の視点から成人発達・成人学習・成人教育について研究している。
准教授 伊藤 雅隆	主な研究分野は文脈的行動科学，行動分析学。認知行動療法の効果の検討や，セルフヘルプの効果的な実施のための行動分析学的支援法の開発を行っている。

○人間発達心理コース（幼児教育領域）

教員名	研究概要
教授 原野 明子	保育の中での幼児の対人関係や遊びの中での試行錯誤を実際の保育場面から関連する要因について探り，子どもや保育者あるいは保護者が子どもの行動を是非でみるのではなく，その背景や意味を考えることに資することのできる研究をしたいと考えている。
特任教授 村木 洋子 (令和7年度担当)	子ども，保育者，保護者の三者の共同による保育はどのようにして作られるのか。保護者支援のあり方，どの子も「楽しかった！」と思える毎日が送れるような保育について探る。
准教授 保木井啓史	保育者が設定した活動を子どもが「改變していく」という視点からの，主に集まり場面・片付け場面での子どもと保育者の相互作用の質的なアプローチによる検討など。

○人間発達心理コース（臨床心理領域）

教員名	研究概要
教授 青木 真理 (令和9年3月退職予定)	臨床心理学，教育臨床学。教育現場における不登校等の不適応行動への対応，教師の教育相談的実践力養成，スクールカウンセリングの方法，祭祀と心理臨床等についての研究，描画法研究，北欧諸国の若者支援システムについての調査研究。
特任教授 生島 浩 (令和7年度担当)	非行・犯罪臨床学，家族臨床学。司法・矯正保護領域における心理臨床モデル，学校臨床における問題行動のある生徒と保護者のための心理・社会的援助に関する研究，リスク・マネジメントに関する研究，ならびに臨床実践。
特任准教授 鈴木 清 (令和7年度担当)	福祉心理学，福祉行政の支援者，児童福祉分野における人材育成とメンタルヘルス，被支援者の実態調査と，心理的ケア，支援にかかわる研究。
特任教授 市川 英雄 (令和7年度担当)	福祉心理学，社会的養護が必要な子どもおよびその家族への心理・社会的支援，児童虐待における親子再統合，社会的養護からの自立支援，障がいのある子どもと家族への支援。
准教授 岸 竜馬	臨床心理学，精神分析的心理療法，弁証法的行動療法，ロールシャッハ・テスト（包括システム）。児童期・思春期から成人に至るまでの心理臨床，パーソナリティや病態水準に関するアセスメント，衝動性や情動制御に対する心理教育，教員と生徒のメンタルヘルス。